三重県埋蔵文化財調査報告 257

城ノ広古墳群・城ノ広遺跡
（第２次）発掘調査報告

２００５（平成１７）年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

今回、報告いたします城ノ広古墳群・城ノ広遺跡は、現在の行政区画では三重郡朝日町に所在する遺跡ですが、旧の郡域でみると伊勢国朝明郡ということになります。この朝明郡は、南側に所在する旧の三重郡や、北に隣接する旧の桑名郡や員弁郡に比べると郡域としては狭く、狭いなりに立郡された背景を考える必要がありました。

朝明郡に関する考古学的調査は、唐三彩の蓋が伴う滑石製の舎利容器が塔心礎から出土した古代寺院、縄生廃寺など注目すべき遺跡も知られていましたが、これまではどちらかといえば低調でした。しかし、近年の四日市市教育委員会の発掘調査で朝明郡衙であることがほぼ判明した四日市市久留倍遺跡をはじめ、第二名神自動車道建設に伴って多くの遺跡の調査が行われるなど、ここ最近、一気に調査事例が増加してきています。これら近年の豊富な考古学的情報は、朝明郡内には多数の有力な遺跡群が、極めて高密度に展開していた様子を明らかにしつつあります。つまり、朝明郡は、狭いにもかかわらず、有力遺跡が密集する、北勢地域でも稀有の地域であったということです。

この朝明郡にあって、いまだ実態に不明な部分が多いのが古墳に関する情報です。近年の調査によって朝明郡内には複数の横穴墓群が築かれた伊勢でも極めて特徴深い古墳文化をもつ地域であることが判明しつつありますが、首長墳に関する情報など、まだまだ不明な点が多いのが現状です。

そうしたなか、今回の城ノ広古墳群の調査は、朝明郡から伊勢湾までを一望のもとに見通せる丘陵に、これまで知られていなかった前方後円墳を含む古墳群が展開していた状況を明らかにし、今後の本地域の古代史を考える上で重要な基礎資料を提出したものといえましょう。

最後になりましたが、本書が過去に学んで豊かな未来像を構築するための一助となることを期待するとともに、県民の皆様のより一層の埋蔵文化財へのご理解とご協力を賜りますことを念願し、序文といたします。

平成17年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県三重郡朝日町大字柿に所在する城ノ広（じょのひろ）古墳群・城ノ広遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2　調査は、主要地方道四日市朝日線緊急地方道路整備事業に伴い、平成12年度に緊急発掘調査を実施したものである。

3　城ノ広古墳群・城ノ広遺跡は、平成12～13年度に朝日町柿土地区画整備事業に伴い朝日町教育委員会により発掘調査が実施されている。そのため町調査分を第１次調査とし、当報告書を第２次調査とする。

4　発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。

＜平成12年度（発掘調査）＞

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

技師　水谷　豊　研修員　萩　良樹

土工委託　　財団法人三重県農業開発公社

＜平成13～16年度（報告書作成）＞

三重県埋蔵文化財センター

主査　森川幸雄、田中久生、竹田憲治　技師　穂積裕昌

技術補助員　酒井巳紀子

5　調査にかかる費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。

6　調査にあたっては、地元の方々をはじめ、朝日町教育委員会、四日市市教育委員会、および県の関係機関から多大な協力を受けたことを明記する。なお、挿図（第４図遺構平面図、第22図城ノ広1号墳の推定復原）と写真図版（ＰＬ１朝明川と城ノ広古墳群・城ノ広古墳群全景、ＰＬ２調査区全景１・２）は、朝日町教育委員会より資料の提供をうけた。

7　当報告書の挿図の方位は、全て国土座標第Ⅵ系に属する座標北を用いた。

8　当報告書での遺構番号は、通番となっている。また、遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

ＳＤ・・・溝

9　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10　本書の執筆は、水谷、酒井、穂積が担当した。また、遺構の写真撮影は水谷が、遺物の写真撮影は田中が行い、全体の編集は穂積が行った。

本文目次

Ⅰ　前言……（水谷）　1
　1　調査の契機……　1
　2　調査の経過……　1
　3　調査の方法……　1
　4　文化財保護法等にかかる諸通知……　1
Ⅱ　位置と歴史的環境……（水谷・酒井）　2
Ⅲ　遺構……（水谷）　6
　1　概要……　7
　2　遺構各節……　10
　3　朝日町調査分とその関係……　12
Ⅳ　遺物……（穂積）　13
　1　古墳出土の遺物……　13
　2　包含層等出土遺物……　15
Ⅴ　まとめ……（穂積）　32

挿図目次

第１図　遺跡位置図 ……3
第２図　遺跡地形図 ……4
第３図　調査区位置図 ……4
第４図　遺構平面図 ……5
第５図　遺構平面図 ……6
第６図　３号墳平面図・断面図 ……7
第７図　３号墳土層断面図 ……8
第８図　６号墳平面図・断面図 ……9
第９図　２・４号墳・ＳＤ８平面図・断面図 ……10
第10図　５号墳平面図・断面図 ……11
第11図　埴輪棺出土状況図 ……12
第12図　２号墳南周溝、３号墳南周溝出土遺物実測図 ……16
第13図　３号墳南周溝出土遺物実測図 ……17
第14図　３号墳南周溝出土遺物実測図 ……18
第15図　３号墳南周溝出土遺物実測図 ……19
第16図　３号墳南周溝出土遺物実測図 ……20
第17図　３号墳南周溝出土遺物実測図 ……21
第18図　３号墳東・西周溝、６号墳南周溝出土遺物実測図 ……22
第19図　６号墳西周溝、５号墳南・東周溝・埴輪棺出土遺物実測図 ……23
第20図　３号墳南周溝、４号墳西周溝、ＳＤ８、包含層等出土遺物実測図 ……24
第21図　包含層等出土遺物実測図 ……25
第22図　城ノ広１号墳の推定復原 ……33

表目次

第１表　出土遺物観察表① ……26
第２表　出土遺物観察表② ……27
第３表　出土遺物観察表③ ……28
第４表　出土遺物観察表④ ……29
第５表　出土遺物観察表⑤ ……30
第６表　出土遺物観察表⑥ ……31

写真図版目次

ＰＬ１　朝明川と城ノ広古墳群
　　城ノ広古墳群全景
ＰＬ２　調査区全景１
　　調査区全景２
ＰＬ３　２号墳周溝
　　３号墳
ＰＬ４　３号墳
　　３号墳南周溝遺物出土状況
ＰＬ５　３号墳北周溝土層断面
　　５号墳
ＰＬ６　５号墳埴輪棺出土状況
　　５号墳埴輪棺出土状況
ＰＬ７　５号墳埴輪棺出土状況
　　５号墳埴輪棺出土状況
ＰＬ８　６号墳
　　６号墳北周溝土層断面
ＰＬ９　出土遺物（１）
ＰＬ10　出土遺物（２）
ＰＬ11　出土遺物（３）
ＰＬ12　出土遺物（４）
ＰＬ13　出土遺物（５）
ＰＬ14　出土遺物（６）
ＰＬ15　出土遺物（７）
ＰＬ16　出土遺物（８）

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、第二名神）の建設事業に伴い、周辺の旧来からの道路は混雑が予想される。そのため第二名神の開通以前の県道改良が急務となり、それに伴う発掘調査が行われている。

今回発掘調査の行われた城ノ広古墳群・城ノ広遺跡は、三重郡朝日町大字柿に所在する。当遺跡では今回の発掘調査地域も含め宅地造成事業が行われており、朝日町教育委員会によって遺跡の所在が明らかになったところである。

2　調査の経過

（1）調査経過概要

調査は11月21日から重機による表土掘削を開始し、３月15日に無事現場作業を終了した。冬の寒い時期ではあったが、調査区が南側の丘陵斜面であったことから比較的暖かく作業を行うことができた。調査区は斜面のため作業の行いにくい状況ではあったが、作業員各位の暖かいご配慮により無事終了することができた。感謝申し上げたい。

（2）調査日誌抄

11月17日　農業開発公社との事前現地協議

11月21・22・24日　重機による表土掘削

11月29日　人力掘削開始。

12月４日　包含層掘削。遺構検出。

12月11日　遺構検出。遺構掘削。円筒埴輪片出土。

12月19日　３号墳西周溝より須恵器壷２個体分と思われる破片がまとまって出土。

12月21日　３号墳南周溝から須恵器・埴輪片が多量に出土。埴輪には形象埴輪もあり。

12月26日　３号墳西周溝のコーナー部近くから円筒埴輪が重なって出土。

１月10日　６号墳南周溝から須恵器がまとまって出土。ただし、かなり浮いた状態である。石製紡錘車出土。

１月17日　４号墳南周溝の遺物集中部分を清掃、写真撮影。

１月18日　４号墳南周溝の遺物取上げ開始。朝顔形埴輪、形象埴輪もある。

１月19日　４号墳南周溝遺物取上げ。整理箱８箱にものぼる。

１月22日　上方から再掘削。掘り残しが多いことが判明。

２月13日　５号墳円筒埴輪棺清掃・写真撮影。両端は他の埴輪で蓋がされている事が判明。

２月14日　遺構掘削。円筒埴輪棺実測。

２月15日　円筒埴輪棺取上げ。

３月５日　遺構掘削終了。清掃。

３月６日　朝日町の現場で航空測量、空中写真撮影。

３月８日　清掃・写真撮影・実測開始。

３月12日～14日　実測。

３月15日　完全撤収。

3　調査の方法

（1）小地区の設定について

今回の調査では調査区を４m四方の升目で区切ることにより小地区を設定した。なお、この小地区設定は国土座標とは無関係である。

（2）遺構図面について

調査区の平面図は１／20で作成し、その平面図に50㎝間隔でレベルを測り、コンター図を作成した。出土状況については１／10の図面を作成したものもある。

（3）遺構写真について

調査区の記録写真は、モノクロネガとカラーリバーサルフィルムを用い、35㎜、ブローニー判を撮影した。

撮影に使用したカメラはアサヒペンタックス６×７、ニコンFM２である。

4　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法第58条の２第１項の規定により平成12年11月20日付教埋第275で「発掘調査の報告」を三重県教育委員会教育長へ行った。また、出土遺物については、三重県教育委員会から平成13年４月４日付教ス生第８-１号で四日市北警察署長宛「埋蔵文化財の発見・認定」が通知されている。　（水谷）

Ⅱ　位置と環境

城ノ広古墳群・城ノ広遺跡（１）は、三重郡朝日町大字柿字城ノ広に所在する周知の遺跡である。朝明川左岸の丘陵南斜面に位置し、標高は丘陵上部で約58.0m、低いところでは約30.0mであり、南北に細長く広がる遺跡である。調査区は丘陵の上部に位置し、標高は58.0m～51.0mである。

鈴鹿山脈釈迦ヶ岳を源とする朝明川は、中流域で北岸の朝日丘陵と南岸の垂坂丘陵の間を流れ伊勢湾に注ぐ。周辺の丘陵には多くの遺跡が所在し、第二名神建設に伴う事前の発掘調査を行っている。ここでは主に古墳時代を中心に周辺の状況を概述する。

弥生時代以降、海岸低地に面する丘陵上や低地部に遺跡が分布する。海蔵川と三滝川に挟まれた生桑丘陵に、多重環濠を有する大谷遺跡（２）と永井遺跡（３）が営まれる。弥生中期になると朝日丘陵の南東部で集落が営まれる。菟上遺跡（４）では棟持掘立柱建物や竪穴住居が確認され、方形周溝墓が検出された山村遺跡（５）や銅鐸が江戸時代に見つかっている伊坂遺跡（６）と合わせ、集落域・墓域・祭祀域を内包した大集落群を形成する。後期には谷を挟んだ西側に西ヶ広遺跡（７）が存在する。また、金塚遺跡（８）は高地性集落で、竪穴住居の埋土から銅鐸片が出土している。さらに垂坂丘陵に位置する山奥遺跡では、多数の竪穴住居が確認されている。

一方、低地部での遺跡確認は埋没もあって現在のところ低調であるが、辻子遺跡（９）では中期後葉～後期の集落及び水田が検出されているほか、朝明川右岸の下之宮遺跡（10）では中期を通しての遺物の出土が確認されている。

古墳時代の北勢地域北部は、前期古墳はあまり見られない地域である。その中で海蔵川流域の阿倉台地の先端に志氐神社古墳（11）がある。前方後円墳もしくは後方墳と考えられ、内行花文鏡・車輪石などが出土している。また、員弁川北岸には前方後円墳の高塚古墳（12）が存在する。

朝明川沿岸には、中期の方墳を主体とする広古墳群（13）がある。このうちＢ１号墳は、１辺31mの方墳で、墳丘南辺の偏った位置に造り出しのつく特異なものである。その東にある浄ヶ坊１号墳（14）は径36mの円墳とされるが、方墳の可能性も考えられている。その他、朝明川の谷底平野を望む丘陵・台地縁辺部を中心に単独もしくは数基から十数基程度の小規模な古墳群が存在する。これらはほとんどが後期古墳と考えられるが、詳細の明らかなものはほとんどない。その中で南岸の八幡古墳（15）は複室形態の構造の横穴式石室として知られている。また、近年の発掘調査の結果、公事出古墳群や今回の調査で明らかになった城ノ広古墳群など新たに発見された古墳も存在し、未知の古墳も多く存在すると思われる。

ところで、朝明川流域には横穴墓が存在する。従来は朝明川南岸の死人谷横穴古墳群（16）が知られていただけであったが、近年の発掘調査により広永横穴墓群（17）や金塚横穴墓群（８）、さらに菟上遺跡でも１基確認され、当地域の特徴を示す墓制であることが明らかとなった。

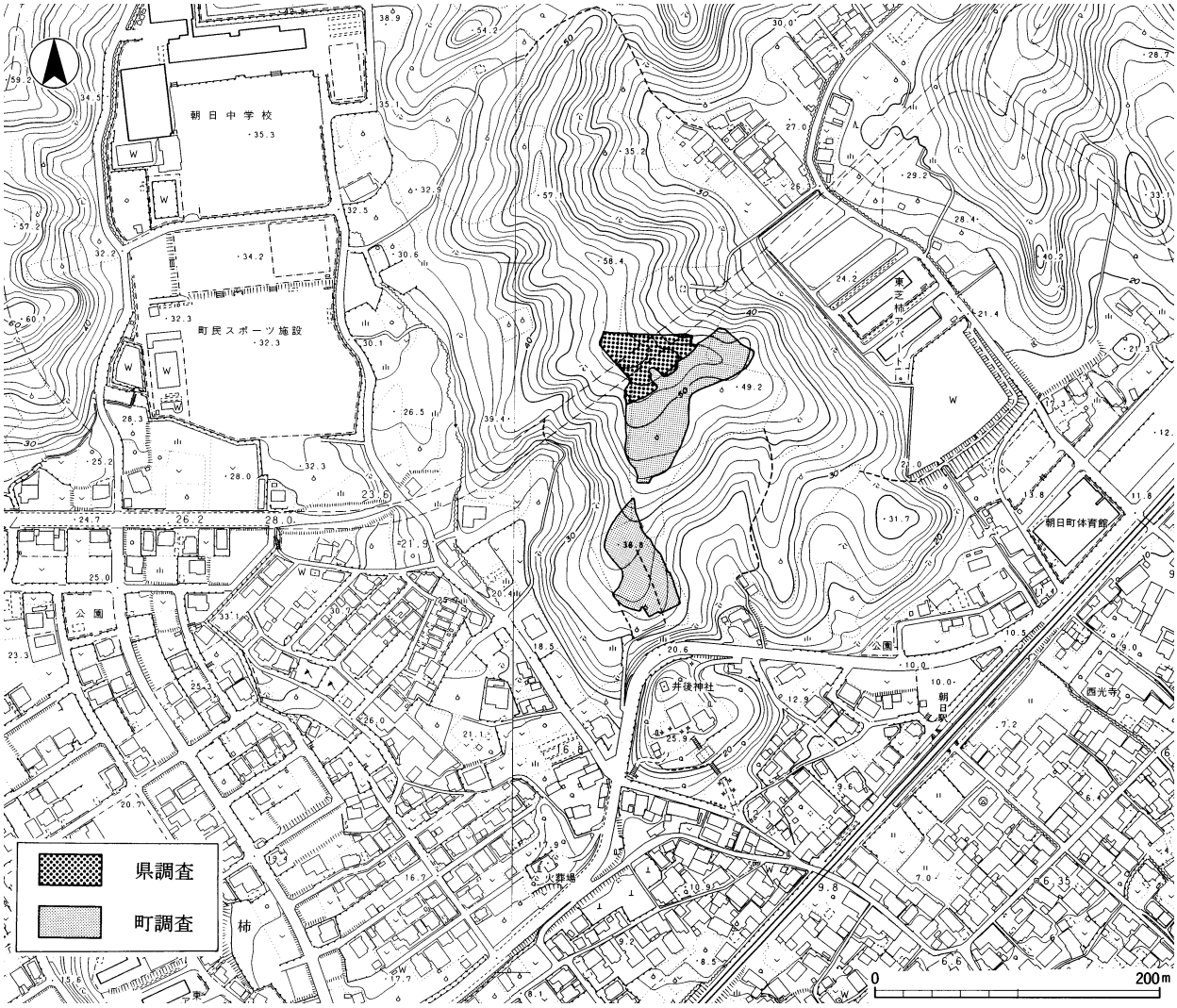
古代に入ると、朝明川流域は「朝明郡」に編成される。郡内の白鳳寺院としては朝日町の縄生廃寺（18）が建立される。城ノ広遺跡・古墳群の所在する丘陵の北東側に所在し、塔心礎からは滑石製の舎利容器と唐三彩の蓋が出土し、注目された。

また、朝明郡の郡衙は、朝明川の南岸に所在する久留倍遺跡（19）であることが四日市市教育委員会による近年の調査で判明した。さらに、菟上遺跡や西ヶ広遺跡でも古代の有力集落が発見されており、徐々にではあるが朝明郡の古代集落の実態が明らかになりつつある。

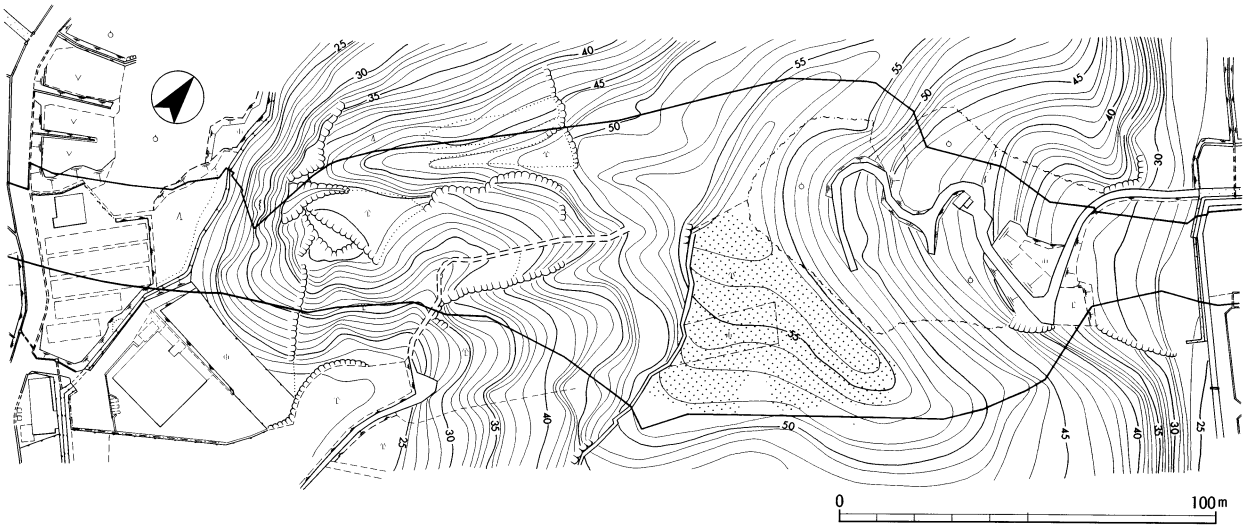
古代末から中世においては、辻子遺跡で大規模な掘立柱建物群が検出され、有力者層を中心とした大規模な集落が形成されていたことが指摘されている。中世後期には、朝明川流域に大規模な中世城館が多数作られる。また近世後期には、森有節により萬古焼が復興された。大字小向には有節の墓と窯跡の伝承地（20）が存在している。　　（水谷・酒井）

1：城ノ広遺跡　2：大谷遺跡　3：永井遺跡　4：菟上遺跡　5：山村遺跡　6：伊坂遺跡　7：西ヶ広遺跡
8：金塚遺跡　9：辻子遺跡　10：下之宮遺跡　11：志氐神社古墳　12：高塚古墳　13：広古墳群　14：浄ヶ坊１号墳
15：八幡古墳　16：死人谷横穴古墳群　17：広永横穴墓　18：縄生廃寺　19：久留倍遺跡　20：森有節窯跡

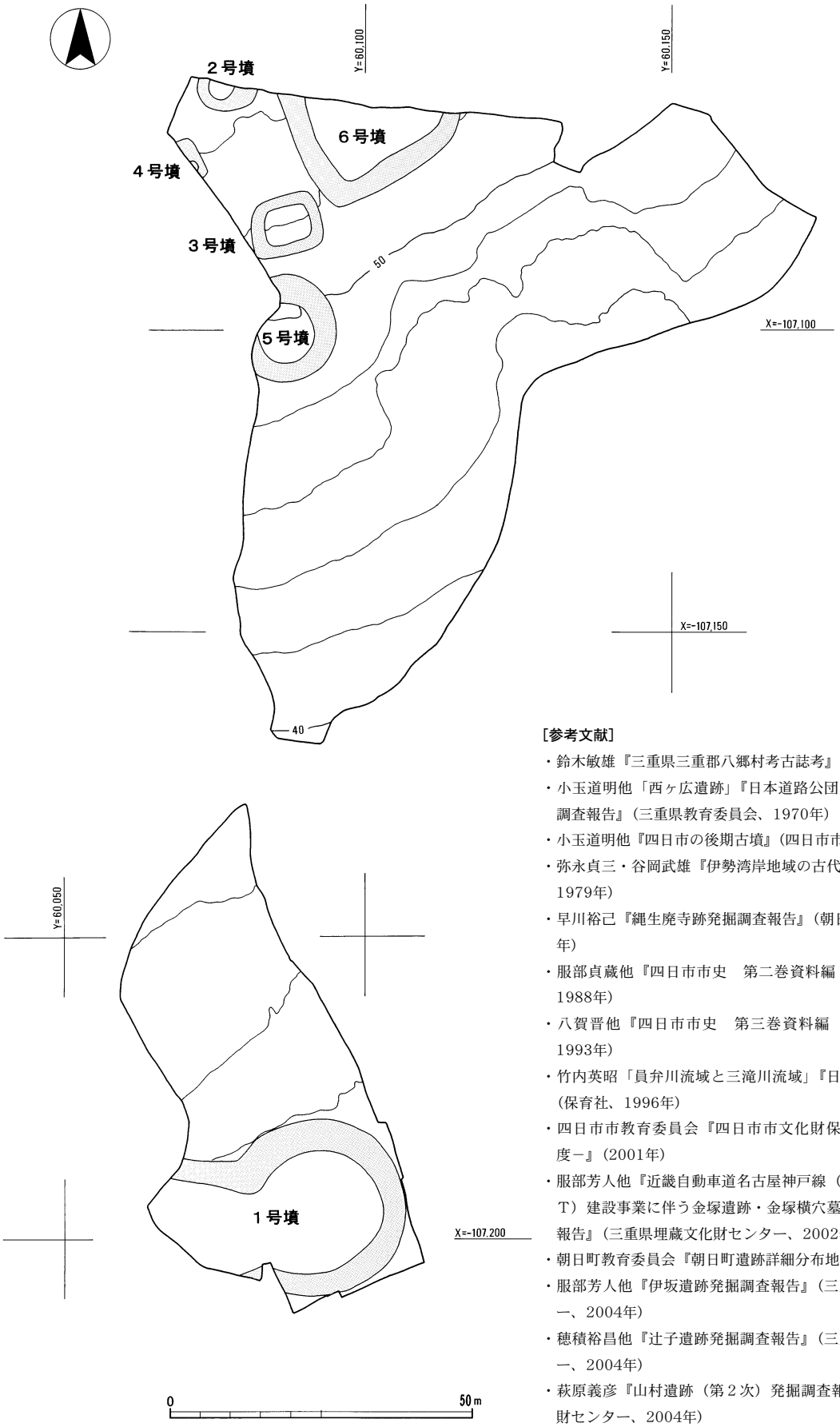
第１図　遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院１：25,000「桑名」「菰野」「四日市東部」「四日市西部」〕



第２図　遺跡地形図（１：5,000）



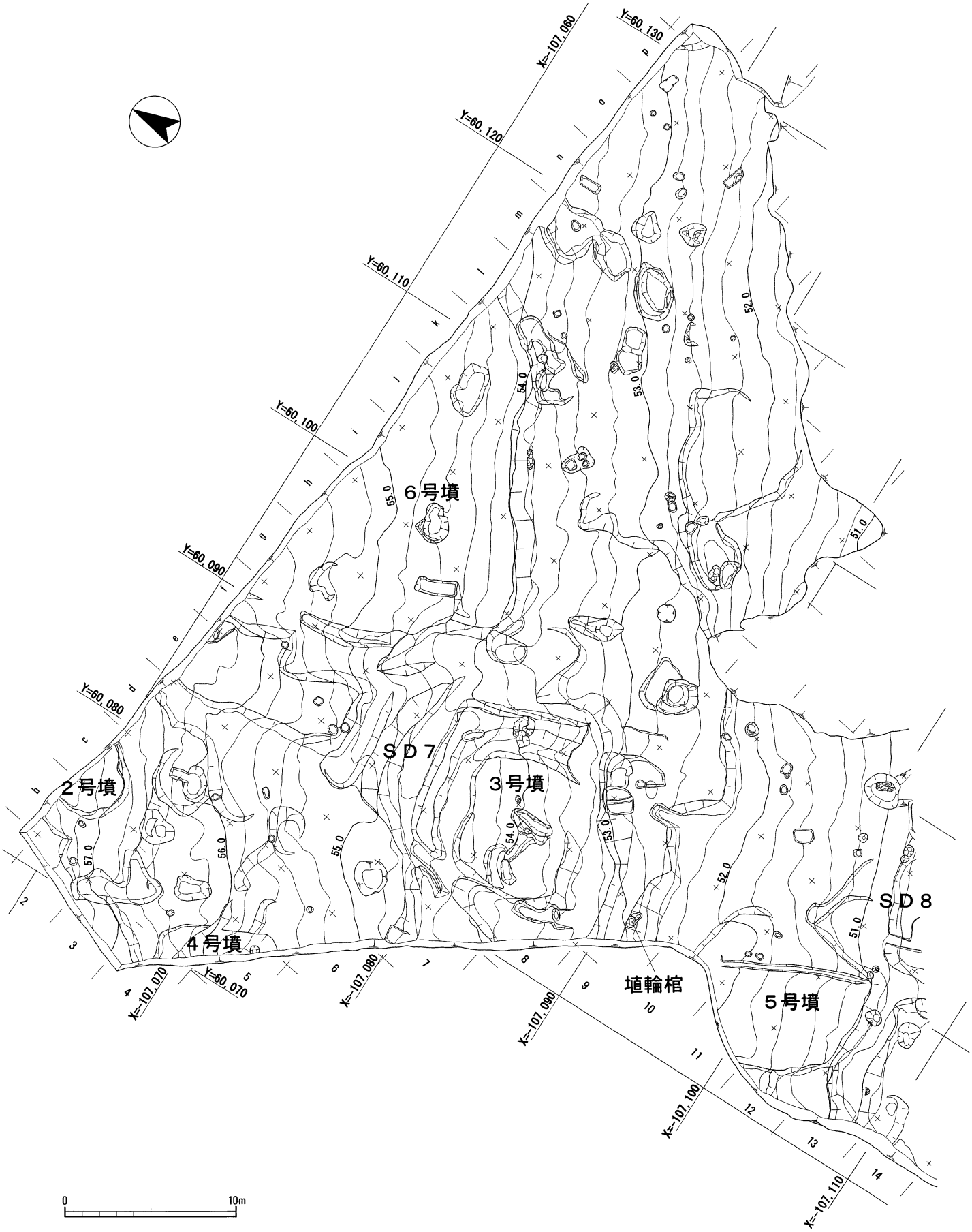
第３図　調査区位置図（１：2,000）



［参考文献］

・鈴木敏雄『三重県三重郡八郷村考古誌考』（1938年）
・小玉道明他「西ヶ広遺跡」『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会、1970年）
・小玉道明他『四日市の後期古墳』（四日市市教育委員会、1973年）
・弥永貞三・谷岡武雄『伊勢湾岸地域の古代条里制』（東京堂出版、1979年）
・早川裕己『縄生廃寺跡発掘調査報告』（朝日町教育委員会、1988年）
・服部貞蔵他『四日市市史　第二巻資料編　考古Ⅰ』（四日市市、1988年）
・八賀晋他『四日市市史　第三巻資料編　考古Ⅱ』（四日市市、1993年）
・竹内英昭「員弁川流域と三滝川流域」『日本の古代遺跡52三重』（保育社、1996年）
・四日市市教育委員会『四日市市文化財保護年報12－平成12年度－』（2001年）
・服部芳人他『近畿自動車道名古屋神戸線（愛知県境～四日市ＪＣＴ）建設事業に伴う金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）
・朝日町教育委員会『朝日町遺跡詳細分布地図』（2003年）
・服部芳人他『伊坂遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2004年）
・穂積裕昌他『辻子遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2004年）
・萩原義彦『山村遺跡（第２次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2004年）

第４図　遺構平面図（１：1,000）



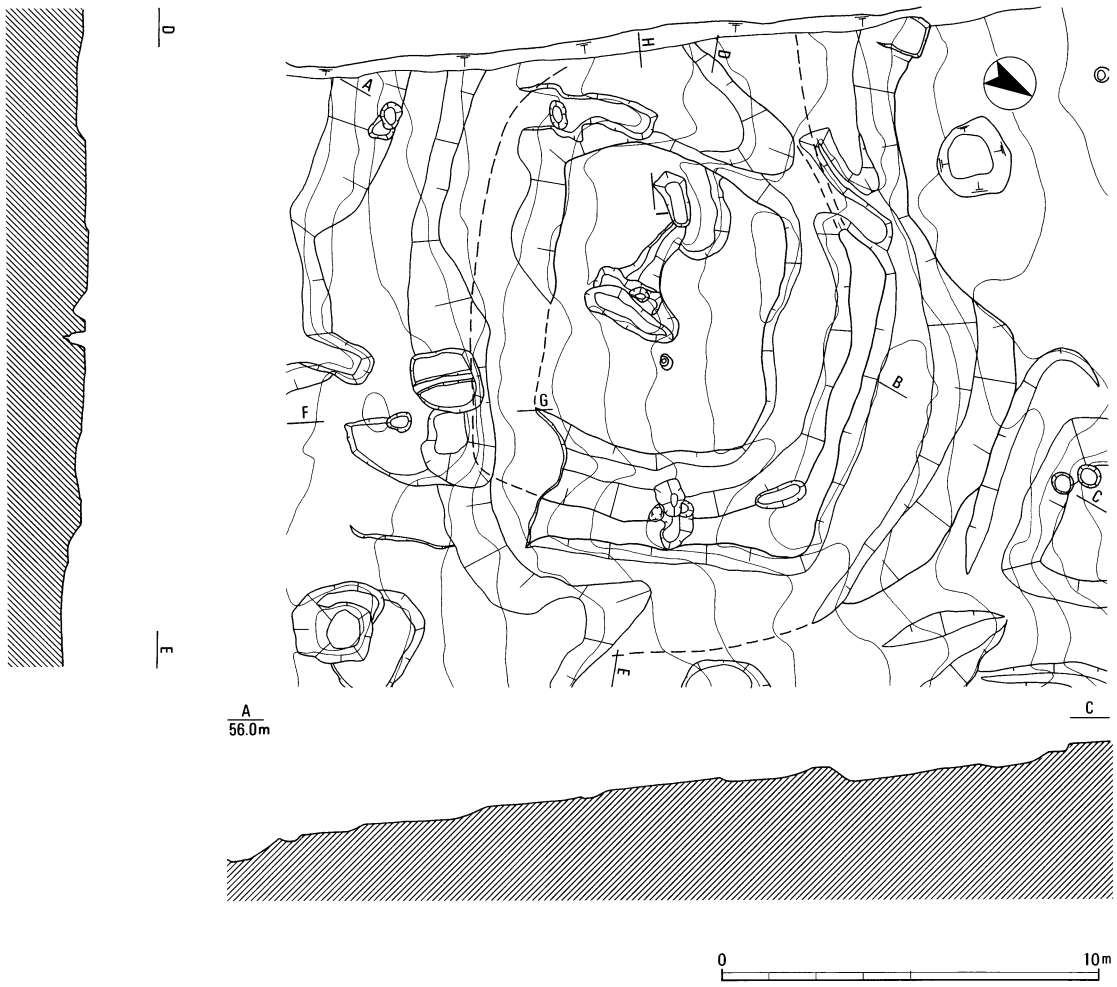
第５図　遺構平面図（１：300）

Ⅲ　遺構

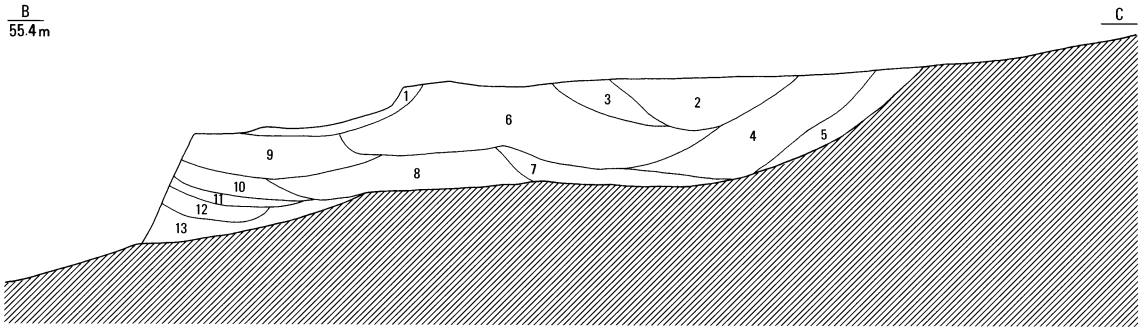
1　概要

城ノ広古墳群・城ノ広遺跡は朝明川左岸の丘陵南斜面に位置する遺跡で、南北約250m、標高約30～58mである。調査区は斜面上部に位置し、標高約53～58mである。この斜面は調査区の南側では緩斜面となり朝日町教育委員会による発掘調査（以下、第１次調査）で、７世紀代の掘立柱建物などが確認されている。さらに南は細い尾根上となり、その先で広い緩斜面となる。第１次調査ではこの斜面の先端標高約30mで前方後円墳（城ノ広古墳群１号墳）の周溝が確認されている。１号墳と調査区の比高は約23～28mである。

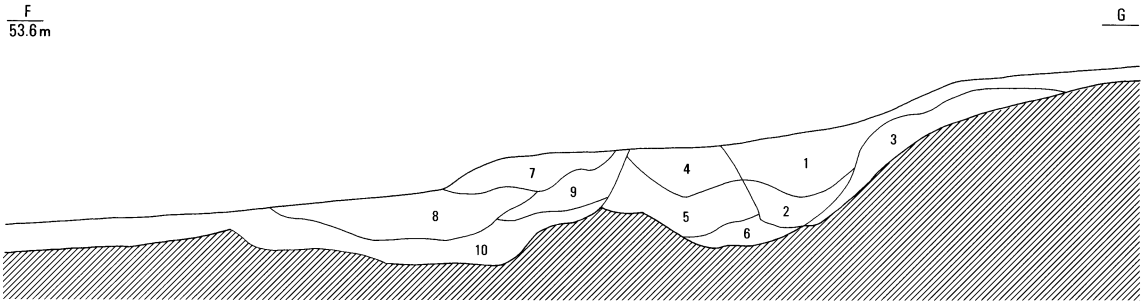
調査前では古墳の高まりを確認することはできなかったが、１号墳の存在や、伊勢湾を眺望できる見晴らしの良い丘陵上部に当たることなどからその存在が考えられた。調査でも古墳の盛土はまったく確認できず、埋葬施設も確認できなかった。また、調査区は削平による改変が激しく、埋土の大半が地山の流出土であることから検出は困難なため、締まりのない土を順次剥いでいく調査となり、明確な周溝の検出は行うことができなかった。結果として、周溝はそもそも高所側（北溝）はほとんど掘削されず、低所側（南溝）を深く掘削されていたと推測され、低い側から見て墳丘らしき高まりが確認できるに過



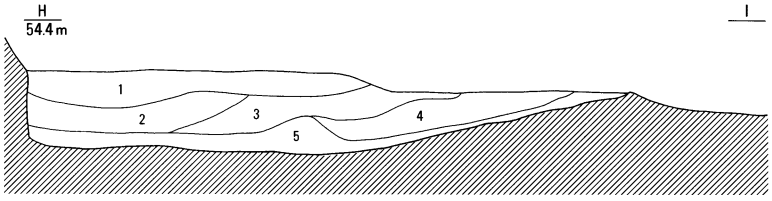
第６図　３号墳平面図・断面図（１：200）



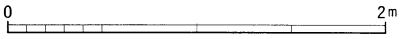
1	表土	
2	10YR5/6黄褐色粘質土	小石混
3	7.5YR5/8明褐色土	
4	10YR5/6黄褐色粘質土	
5	5YR5/8明赤褐色粘質土	しまりなし
6	10YR5/8黄褐色土	炭化物混
7	7.5YR5/6明褐色粘質土	
8	5YR5/8明赤褐色粘質土	しまりなし
9	7.5YR5/8明褐色粘質土	
10	10YR5/6黄褐色粘質土	小石混
11	砂質土	小石多混
12	9(10YR5/6黄褐色粘質土	小石混)と10(砂質土　小石多混)の互層状土
13	10YR5/6黄褐色粘質土	小石混



1	7.5YR4/6褐色粘質土	しまりなし 炭混
2	7.5YR5/8明褐色粘質土	
3	5YR5/8明赤褐色砂質土	小石混 地山に酷似(5YR4/8赤褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ混)
4	5YR5/8明赤褐色粘質土	小石混
5	5YR5/8明赤褐色粘質土	小石混(7.5YR5/8明褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混)
6	5YR5/8明赤褐色粘質土	(7.5YR5/8明褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混)
7	7.5YR4/2灰褐色	
8	7.5YR6/8橙色粘質土	
9	7.5YR5/8明褐色土	しまりなし
10	7.5YR6/8橙色地山	粘質土混



1	7.5YR5/8明褐色粘質土	しまりなし
2	7.5YR5/6明褐色粘質土	小石混 炭化物含む
3	10YR5/6黄褐色土	しまりなし
4	地山ﾌﾞﾛｯｸ	10YR5/6 黄褐色土多混
5	5YR5/8明赤褐色地山	しまりなし 3混



第７図　３号墳土層断面図（１：40）

1　7.5YR5/6明褐色粘質土　しまりなし
2　しまりのない地山　1混

第８図　６号墳平面図（１：200）・断面図（１：40）

ぎない。遺物も概ね南周溝および東西周溝の低地部からの出土であり、原位置は保っていないものと思われる。

いずれの溝も直線部を持っているため、５基の方墳と考えられる。朝日町調査で新たに確認された前方後円墳を１号墳、今回の調査で確認された古墳を２～６号墳と命名した。

発掘調査では周溝状の落ち込みごとで遺物を取上げているが、ここでは各古墳ごとに説明する。また、正確な方位と外れるが調査時の呼称にあわせて丘陵高位置を北、低位置を南として記述した。

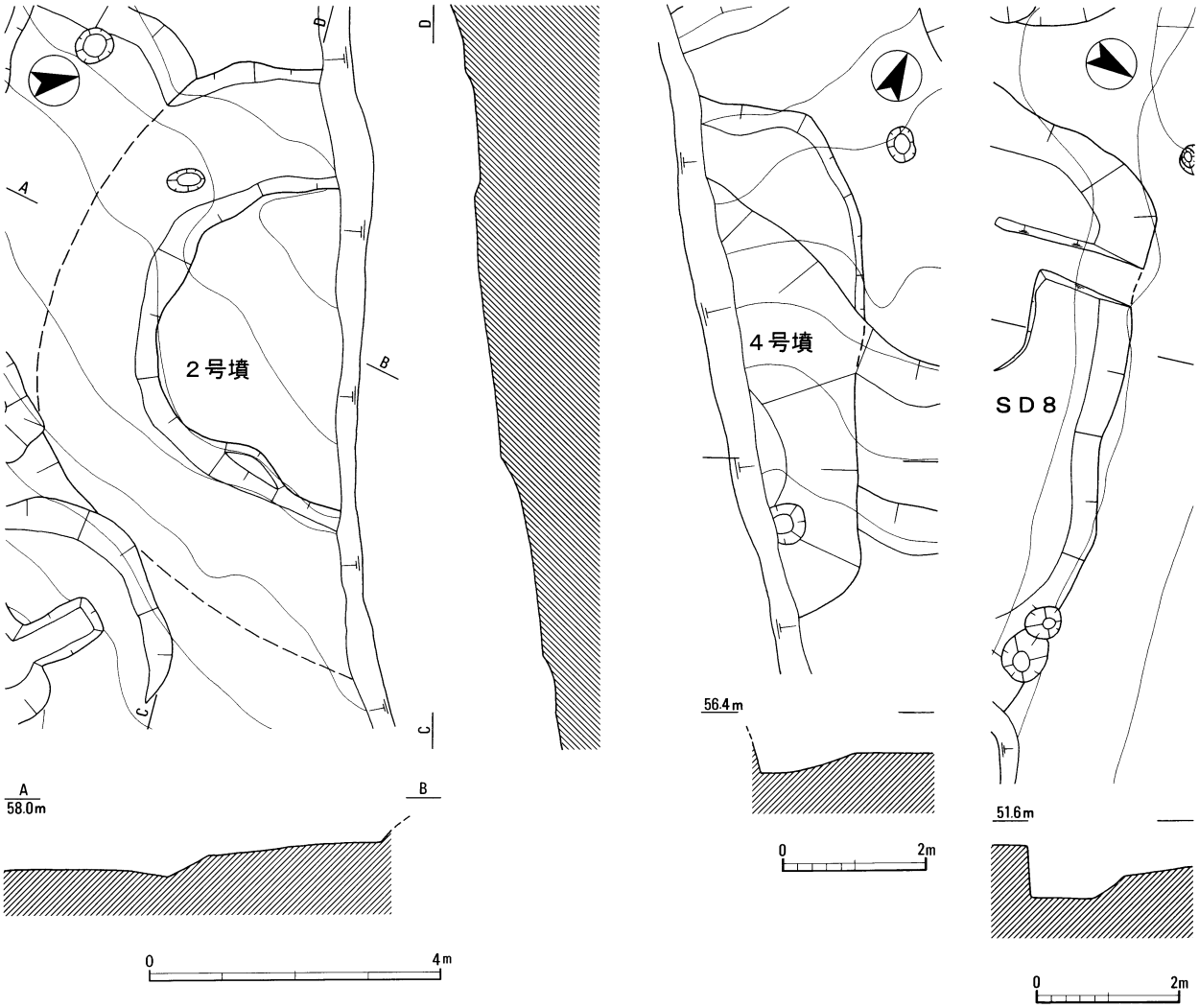
２　遺構各節

２号墳

調査区の北部で南溝と西溝を確認した。一部のみのため規模は不明だが、あまり規模の大きくない方墳と考えられる。南周溝外側がはっきりしておらず、やや広い範囲で南周溝として遺物を採集した。須恵器杯蓋身、壷、土師器台付甕台部、円筒埴輪片が出土しており、５世紀末～６世紀前半のものと考えられる。

３号墳

調査区中央西部で確認した。墳丘側の周溝の落ち込みは比較的明瞭で、墳丘規模は南北約6.0m、東西約8.0mである。遺物は南周溝から埴輪・須恵器片が多量（整理箱約８箱分）に出土した。やや浮いた状態から出土していること、小破片が多いことから原位置からかなり動いた状態と判断されたため、写真のみで取り上げを行った。遺物は多様で、須恵器有蓋高杯・無蓋高杯･器台･壷･甕など、円筒埴輪･朝顔形埴輪、巫女形･武人などの形象埴輪が出土してい



第９図　２・４号墳・ＳＤ８平面図・断面図（１：100）

る。これらの埴輪は淡輪系であり、５世紀末～６世紀前半のものと思われる。

なお、３号墳北溝の北側（上方側）には小規模な溝状遺構がある。当初、３号墳と切り合いを持つ古墳周溝の可能性も考えたが、北側のみに確認できることから、３号墳の北側を画す、排水などの整地用の溝の可能性を考えている。

６号墳

調査区東側で確認した。南北15m以上、東西20m以上の方墳の可能性があるが、南北はあまり周溝がはっきりしておらず、東西も調査前の通路になっていたため、はっきりとはしない。出土した遺物は５世紀後葉から６世紀初頭中心だが、埴輪が全く出土していないこと、堤瓶が出土していることから６世紀中ごろの遺構であると考えられる。

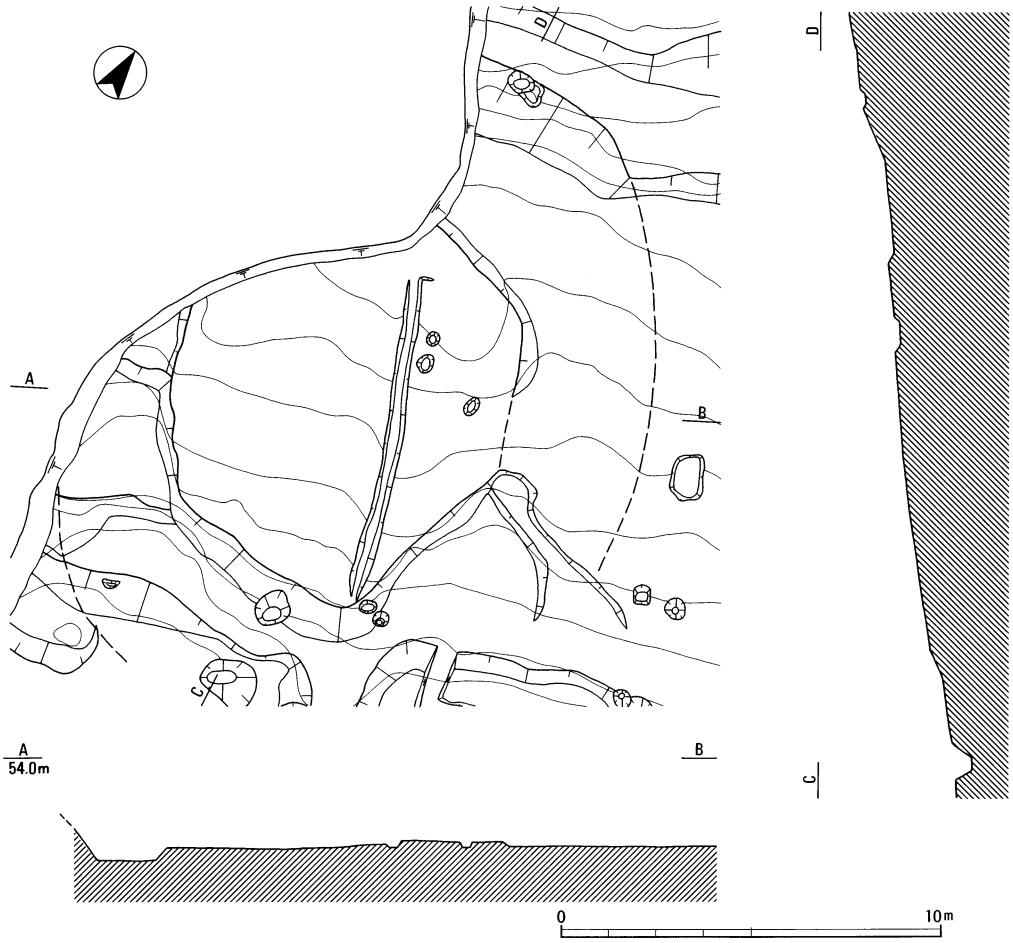
５号墳

調査区の南側で確認した。現況でやや急な斜面に当たり、削平のため形はいびつであるが南北約10.0m、東西約9.0mの方墳と推定される。図示できる遺物は出土していないが、付属する埴輪棺から、５世紀末～６世紀前半の遺構と考えられる。

埴輪棺は、北周溝北側で確認したもので、東西0.55m、南北1.03m、深さ約0.08mの浅い土坑状の遺構である。土圧でつぶれた状態の円筒埴輪が見つかっている。やや小型の埴輪と組み合わせ、口縁部を中にいれこんでいる。底部には軟質の埴輪片を用いて蓋にしている。転落埴輪として取上げてしまったものもあるが、上も覆っていたかもしれない。

４号墳

調査区上部西端で西周溝を確認した。北端・南端



第10図　５号墳平面図・断面図（１：200）

とも曲がるような雰囲気があるため外周が１辺8.0m程度の小規模な方墳と考えられる。須恵器杯蓋身が出土しており、５世紀後半～６世紀初頭の遺構と考えられる。

ＳＤ８

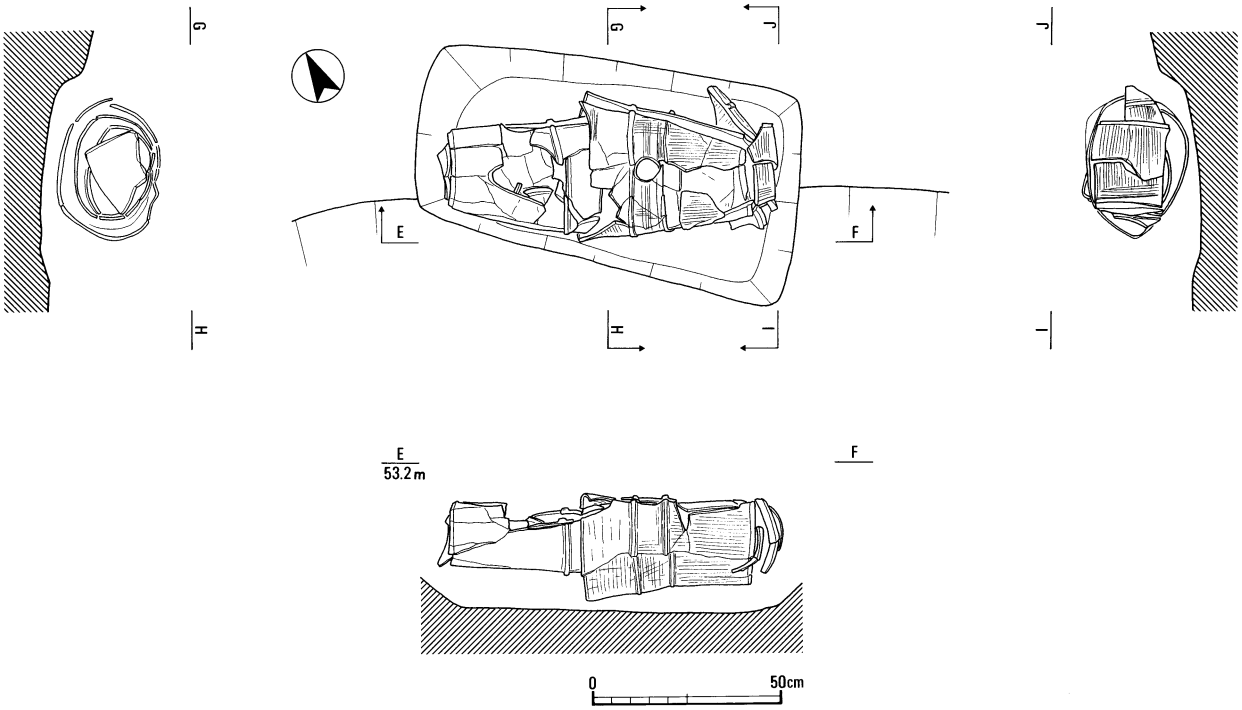
調査区南端で確認した。古墳の北側周溝となる可能性もあるが、７世紀代と考えられる遺物が出土しており、第１次調査で確認された掘立柱建物群に伴う遺構と考えられる。

包含層遺物として取上げたものの中にも同時期と思われるものがＪ３・４グリッドで出土しており、調査区内に遺構が存在した可能性がある。

３　朝日町調査分とその関係

朝日町教育委員会の調査した城ノ広遺跡の下部丘陵では丘陵の最も低い平坦地に全長約36mの前方後円墳が見つかった。墳丘はすでに削平されており、主体部は確認されていない。遺物からは６世紀中ごろと推定されるが、墳形には古い要素もある。

また竪穴住居・前方後円墳を含む平坦地の上部平坦地からは掘立柱建物14棟が検出された。遺物は少ないが、７世紀後半の遺構と考えられる。側柱建物と倉庫と考えられる総柱の建物が確認され、公的な施設の可能性が考えられる。　（水谷）



第11図　埴輪棺出土状況図（１：20）

Ⅳ　遺　　物

遺物が出土した遺構の多くは削平された古墳の周溝であるが、検出の状況が悪く相互の切り合いが不明であったり、周溝を共有する溝があるなど、特定の古墳の周溝と特定しきれない周溝も存在する。そうした遺構特定の不確定要素も残るが、一応、整理された遺構番号に従って、遺物の説明を加えていきたい。

１　古墳出土の遺物

２号墳南周溝出土遺物（１～14）

須恵器（１～12）と土師器（13）、それに埴輪（14）がある。

須恵器では、杯蓋（１～４）、杯身（５～９）、蓋（10）、小壺（11・12）がある。

須恵器では、杯蓋・杯身ともに立ち上がりや法量の大きさに多少ばらつきがあるが、杯身は９を除いていずれも立ち上がりが大きく、逆に底部のロクロケズリは深い。一方、９は明らかに立ち上がりが短小で、底部ロクロケズリも浅く、時期的に後出する。10は、薄手で背の高い蓋で、おそらく11のような小壺に伴う蓋であろう。小壺は、一見土師器の小型丸底壺に類似する形態で、12の胴部にはヘラ記号が施されている。

土師器では、台付甕の脚部を図示した。Ｓ字甕としては新しいいわゆる宇田式段階の脚部で、脚裾の内側への折り返しは既にない。

円筒埴輪は、淡輪技法によって製作された底部片で、外面にタテハケ、内面はナデ・オサエ調整であるが、底部最下部の内面のみヨコナデ調整が施されている。

３号墳南周溝出土遺物（15～93・117～121）

挿図のレイアウト場所が離れ、やや不便をお掛けするが、ご諒解されたい。

今回の調査の中で、最多量の遺物が出土した周溝である。須恵器と埴輪が出土している。

須恵器では、有蓋高杯蓋（15～21）、有蓋高杯（22～27）、無蓋高杯（28）、脚付短頸壺（29）、高杯もしくは脚付短頸壺脚部（30・31）、甕（32・33）、器台（34～36）、甕（37～40）がある。小型器種の組成に杯身を含まず、有蓋高杯や脚付短頸壺といった腰高の器種が中心である。短脚のものが中心であるが、31などやや長脚化を示すものもあり、若干の時間幅が想定される。器台は、高杯形器台（34・36）と筒形器台（35）がある。甕口縁部（32）は、口頸部の外面に波状文を4段にわたって施した装飾豊かな土器である。甕は、法量にややばらつきはあるが、いずれも外面に平行タタキを施して内面はナデ消したもので、口縁端部が肥厚する状況も共通性が高い。

埴輪は、円筒埴輪（41～65）、朝顔形埴輪（66～72）、形象埴輪（73～87）がある。ほとんどが還元焔焼成（無黒斑土師質）によるものであるが、形象埴輪のごく一部に有黒斑のものを含む

円筒埴輪は、２突帯３段の段構成で、確認できる底部はすべて淡輪技法による段をもつ淡輪系円筒埴輪である。底部から口縁部に向かってやや外傾しながら直線的に立ち上がるもので、口縁部のみやや外反を強める。突帯の設定は、第１段目の突帯を円筒高のほぼ中央に貼付し、２段目の突帯を１段目突帯と口縁部との中央にするという、いわゆる二分割突帯による突帯設定を行っている。突帯の形状は、台形である。透孔は第２段目にのみ２個存在し、基本的に円形であるが、例外的に隅丸方形を示唆する個体（121）も存在する。ただし、意図的な方形指向というより、後述の５号墳出土の116などとも比較すると、円形を指向しようとしたものがひしゃげた可能性が高い。調整は、一次調整のタテハケ後、二次調整としてＣ種ヨコハケが施されているが、この二次調整は全体に疎らである。成形時にタタキは用いられていない。

朝顔形埴輪は、あまり遺存状況がよくなく、情報量が限られる。二次口縁部が大きく外反する66や70と、短く直線的に外傾する68のようなものがある。外面のハケは、ナデによって消されているものが多い。なお、朝顔形埴輪で底部まで残っている個体はないが、本遺構の円筒で確認できるものはすべて淡

輪技法によって製作されており、朝顔形埴輪も有段底部を形成していたものと思われる。

形象埴輪は、多くが女性人物埴輪と思われるが、一部に不明品を含む。

73～80・122は、同一個体と思われる女性人物埴輪である。73は最も大きい破片で、通常、上衣を綴じる帯は人物の前面（腹側）で結ばれるが、本例は結んだ表現がないことから女性人物の体部背面破片と判断した。上衣となる袈裟状衣は、右脇（図上右側）の下で袋状の輪を形成しているが、これは近畿地方の女性人物埴輪が左脇下に輪の部分を形成している例とは逆となる。県内の例では、淡輪系の女性人物埴輪で右脇下に輪がくる例があり（松阪市常光坊谷４号墳例、鈴鹿市寺谷17号墳例）、本例もこれに従う。円筒部と人物部の接合部は欠損のため詳細は不明だが、人物部に残る接合部が上衣と裳（スカート状の部分）を一連で積み上げているのに対し、円筒部は外れていることから、円筒部と人物部を分割成形したうえで組み上げた、淡輪系に特有の「分割成形型」の製作を行ったと推定される。なお、帯は線刻で表現され、内部を「×」線刻を重ねて充填している。

他の個体では、74が首周りから肩部の破片で、肩に竹管状刺突装飾を施した襷を廻していることがわかる。

75は、上衣の破片で、三角状に突き出して終わっていることから、73の対面部分、すなわち左脇下にくる部分と思われる。

76は、人物前面の腹部片で、帯を結んで垂れた状態を線刻によって表現している。73では「×」充填であった帯の装飾が、ここでは2列の竹管状刺突の連続に変わっており、同じ帯の結び目部分と廻周部分が装飾表現上異なった表現でなされたものと思われる。

77は、腕の破片で、中空である。

78・79は、隆帯部があり、肩に廻した襷の部分であろう。

80は、輪を形成し、なおかつ線刻表現があることから、上衣右脇下の袋状部で、胴部本体との接合付近の破片と思われる。

122は、頭部の破片である。髷の部分が脱落した女性人物の頭部と推定されるが、頭部に１条の沈線が廻っており、これが鉢巻貼付のための毛引線とすると男性人物埴輪となる可能性もあり、そうなると73～80の女性人物とは別個体となる。

81～87は、上記と同一個体のものも含まれている可能性はあるが、部位が不明だったり、別個体の可能性のあるものを一括した。

このうち、85は平板な板状の表面に円孔を有するもので、線刻による装飾が施されている。円孔部は表面側に屈折して短頸壷口縁状に立ち上がる形態を示す。また、図上左側は斜めに切り落とされた接合部となっており、さらに別の板状部と接合される可能性が高い。人物埴輪の破片としては疑問の残る部分が多く、器種や部位は不明である。

３号墳東周溝（88）

須恵器杯蓋である。天上部の３／４をロクロケズリするが、口縁部と天上部の境の稜はシャープ感に欠ける。

３号墳西周溝（89～93）

須恵器と埴輪がある。

須恵器は、壺（89）、甕（90）、杯身（91）、それに有蓋高杯（92）がある。89は、口縁部が長大で、頸部の括れも大きいことから甕とせず、壺とした。口頸部外面に波状文による加飾が施されている。円筒埴輪（93）は第１段から突帯にかけての破片で、突帯はやや高い方形を呈する。

６号墳南周溝出土遺物（94～102）

石製紡錘車（94）、円筒埴輪（95）、須恵器（96～102）、土師器（103）がある。

石製紡錘車は、立ち上がり部下段に鋸歯文、上段に複合鋸歯文を線刻によって充填する装飾豊かなもので、滑石製である。

円筒埴輪は小破片１点のみであり、混入の可能性も強く想起させるが、他の円筒埴輪と比べて突帯が極めて低いのが特徴である。

須恵器には、杯蓋（96・97）と杯身（98～100）、甕（101）、提瓶（102）がある。杯身・杯蓋は天井部もしくは底部の大部分をロクロケズリするものが多いが、100のみ底部３／５のロクロケズリにとどまり、しかも法量も大きく、他と著しい相違をなす。甕は、本遺跡出土品中、本例のみが平行タタキを右

下がりに施している。

土師器は、Ｓ字甕の脚台部である。伊勢でいうところの「高茶屋式期」に相当する、Ｓ字甕としての衰退期の所産である。

６号墳西周溝出土遺物（104～110）

須恵器（104～107）、土師器（109）・埴輪（108・110）がある。

須恵器には、有蓋高杯蓋（104・105）、杯蓋（106）、杯身（107）がある。105・106・107はいずれも立ち上がりが大きく、天井部ないしは底部のロクロケズリも深く施されている。

土師器は、いわゆるロクロ土師器の杯で、ロクロナデ・糸切り底部で成形されている。

埴輪は、円筒埴輪（108）と人物埴輪片？（110）がある。円筒埴輪は、突帯を含む部分の破片であるが、南周溝出土の95と同様、突帯が非常に低い。

５号墳南周溝出土遺物（111）

須恵器甕である。体部外面に平行タタキが施され、内面はナデ消されている。

５号墳東周溝出土遺物（112）

円筒埴輪である。最上段で、突帯は方形を呈し、調整は１次調整のタテハケ後、Ｃ種ヨコハケが施されている。

５号墳埴輪棺構成埴輪（113～116）

いずれも円筒埴輪で、115と116を合わせ口にし、113と114で蓋を形成していた。完形の115と116は、２突帯３段構成で、２分割突帯法によって突帯を配置し、中段（第２段目）に円形透孔を穿っている。一次調整のタテハケ後、二次調整にＣ種ヨコハケを施すが、最下段は省略気味である。また、内面は、特に上段部分のヨコハケが顕著に残る。115に関しては、内面の板ナデ痕跡も顕著である。

４号墳西周溝出土遺物（123～125）

須恵器杯蓋（123）と杯身（124・125）がある。立ち上がりの長大さは本遺跡出土品のなかで最も大きい。天井部ないしは底部の形状は扁平を呈し、ロクロケズリも深い。こうしたことから、古墳群中、最も遡る時期の所産と思われる。

ＳＤ８出土遺物（126）

須恵器平瓶である。体部に比して、口縁部が大きい。

２　包含層等出土遺物

いわゆる包含層や表土から出土した遺物、それに古墳周溝出土遺物ではあるが、明らかに古墳の存続時期と異なる時期の遺物を一括する。石鏃（127・128）、須恵器（129～138）、土師器（139～141）、埴輪（142～145）、白磁（146）がある。

石鏃　打製石鏃で、127は凹基式、128は平基式である。

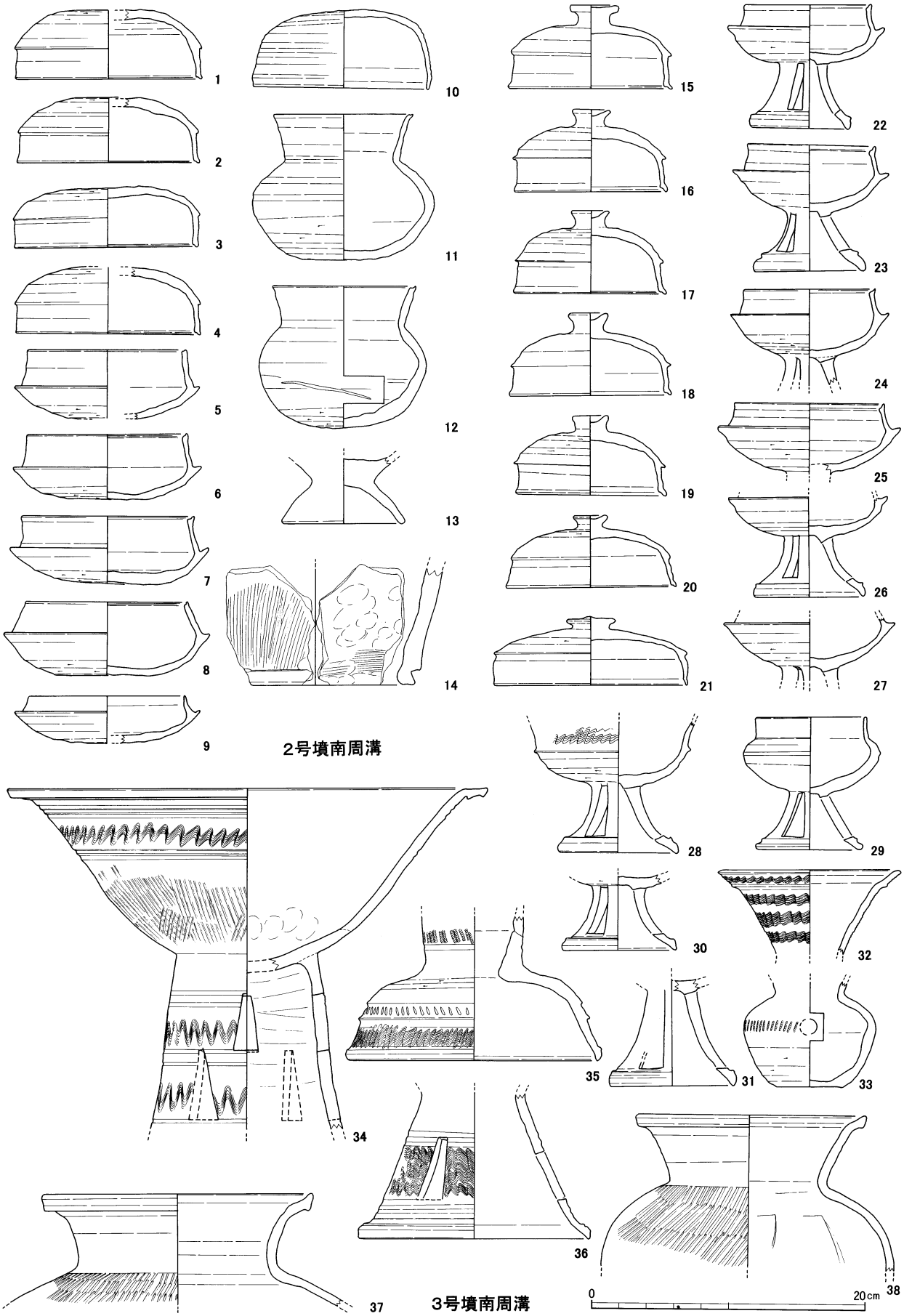
須恵器　杯蓋（129）、杯身（130・131）、有蓋高杯（132）、無蓋高杯（133）、短頸壷（134・135）、壺胴部（136）、長頸壷（137・138）がある。有蓋高杯は短脚であるが、無蓋高杯はやや長脚気味になっている。

土師器　高杯（139・140）、Ｓ字甕脚部（141）を図示した。高杯は、いずれも脚部内面の屈折部に稜線が形成されている。

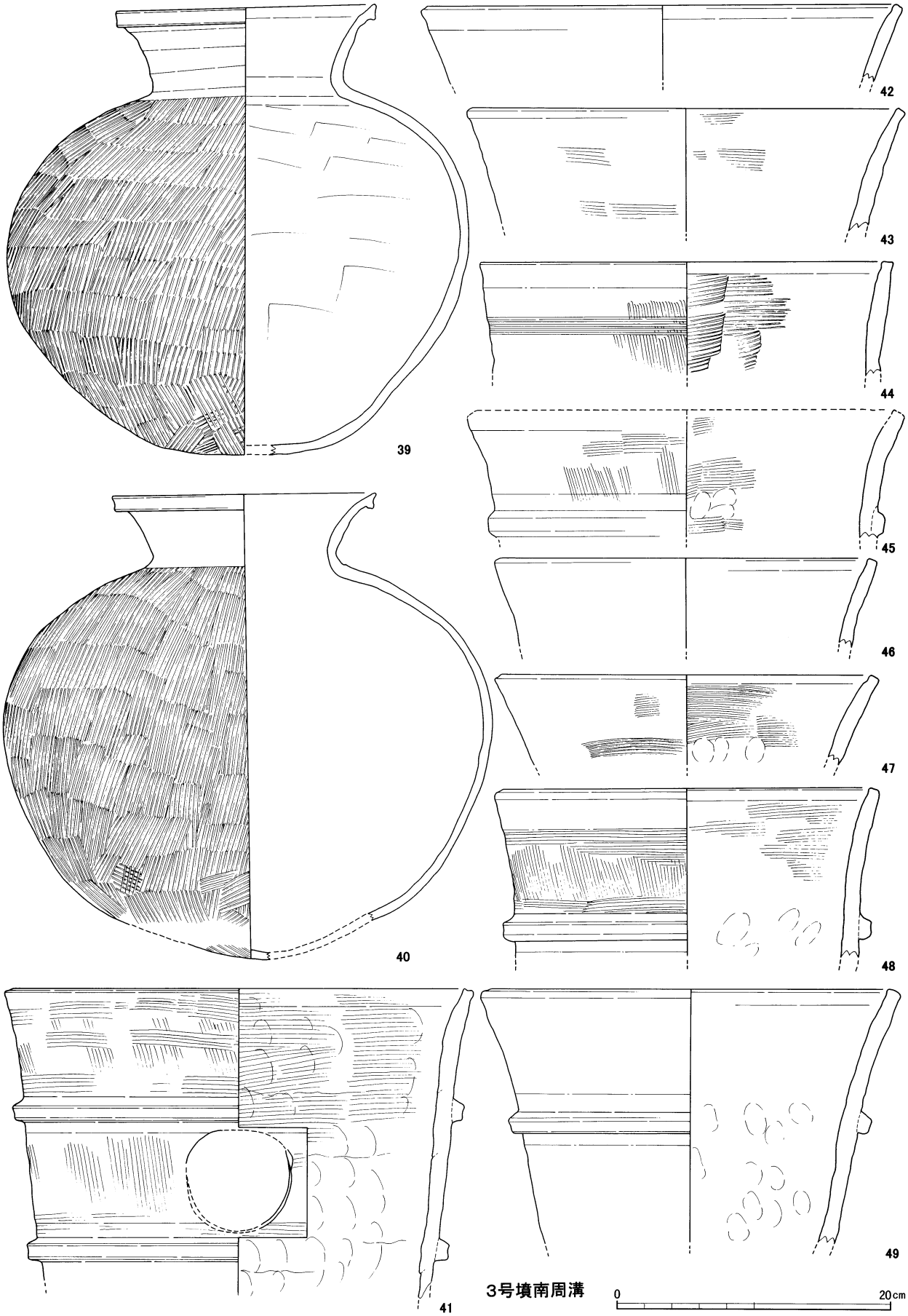
埴輪　人物埴輪片（143）と円筒埴輪（144・145）がある。人物埴輪は、腕の破片で、断面が楕円形を呈する。円筒埴輪は、144がヨコハケを施した突帯部分の破片、145が淡輪技法による底部片である。外面にタテハケが残る。

陶器（145）　器種不明の陶器片である。脚部と思われ、透かし状の装飾もみられるが、詳細はわからない。

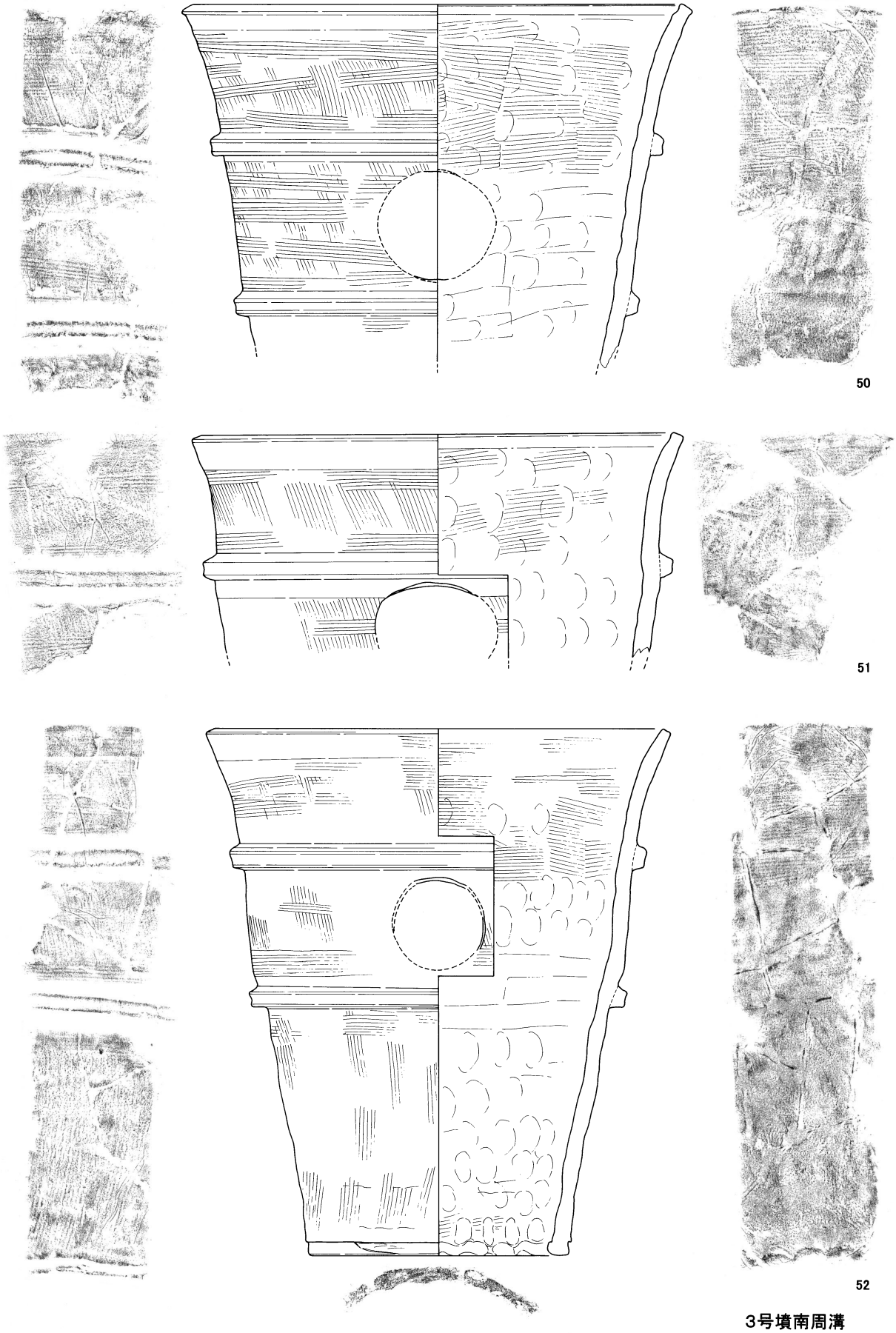
白磁（146）　口縁部が玉縁を呈する白磁碗である。３号墳の南周溝に混在していた。　（穂積）



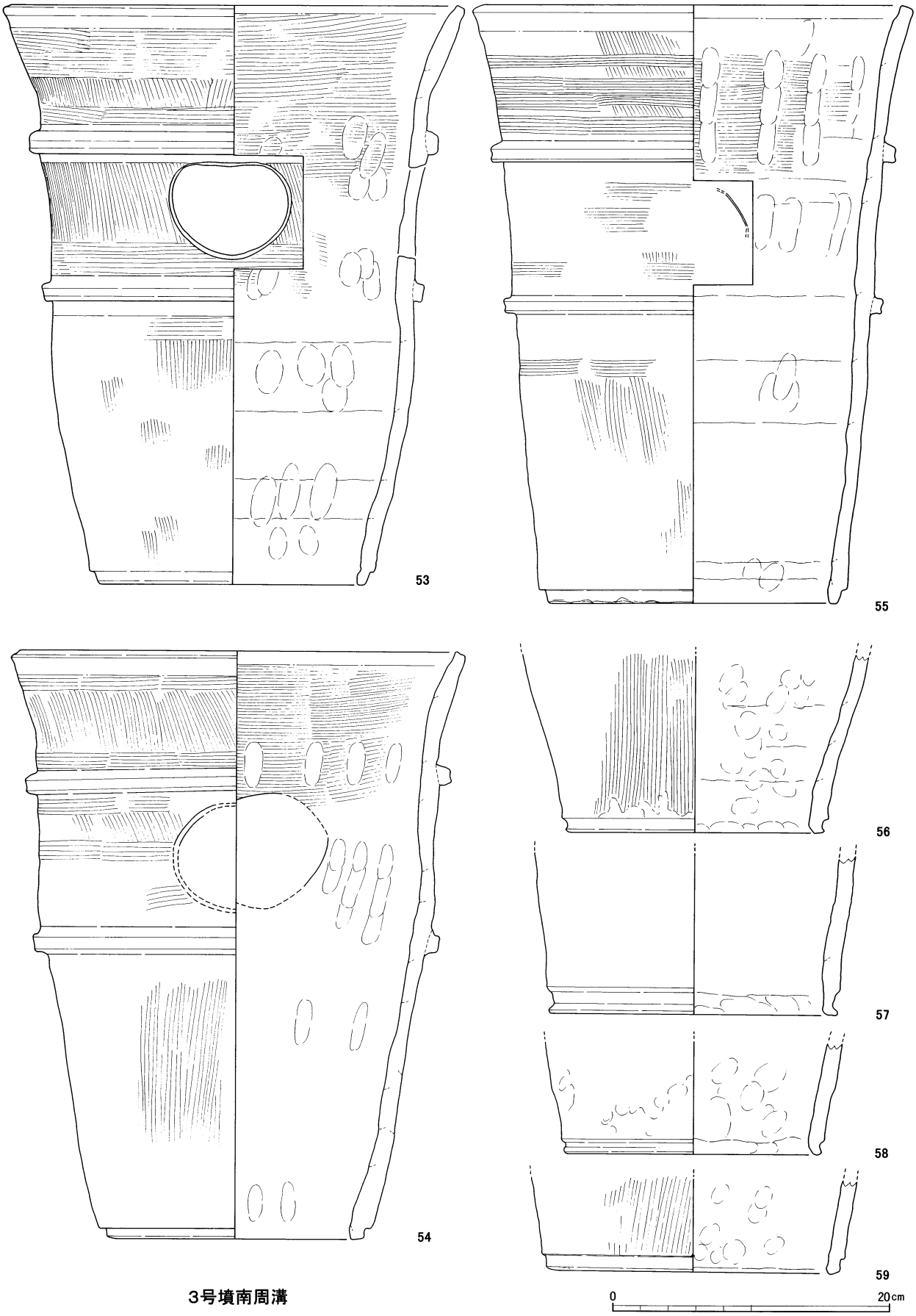
第12図　２号墳南周溝、３号墳南周溝出土遺物実測図（１：４）



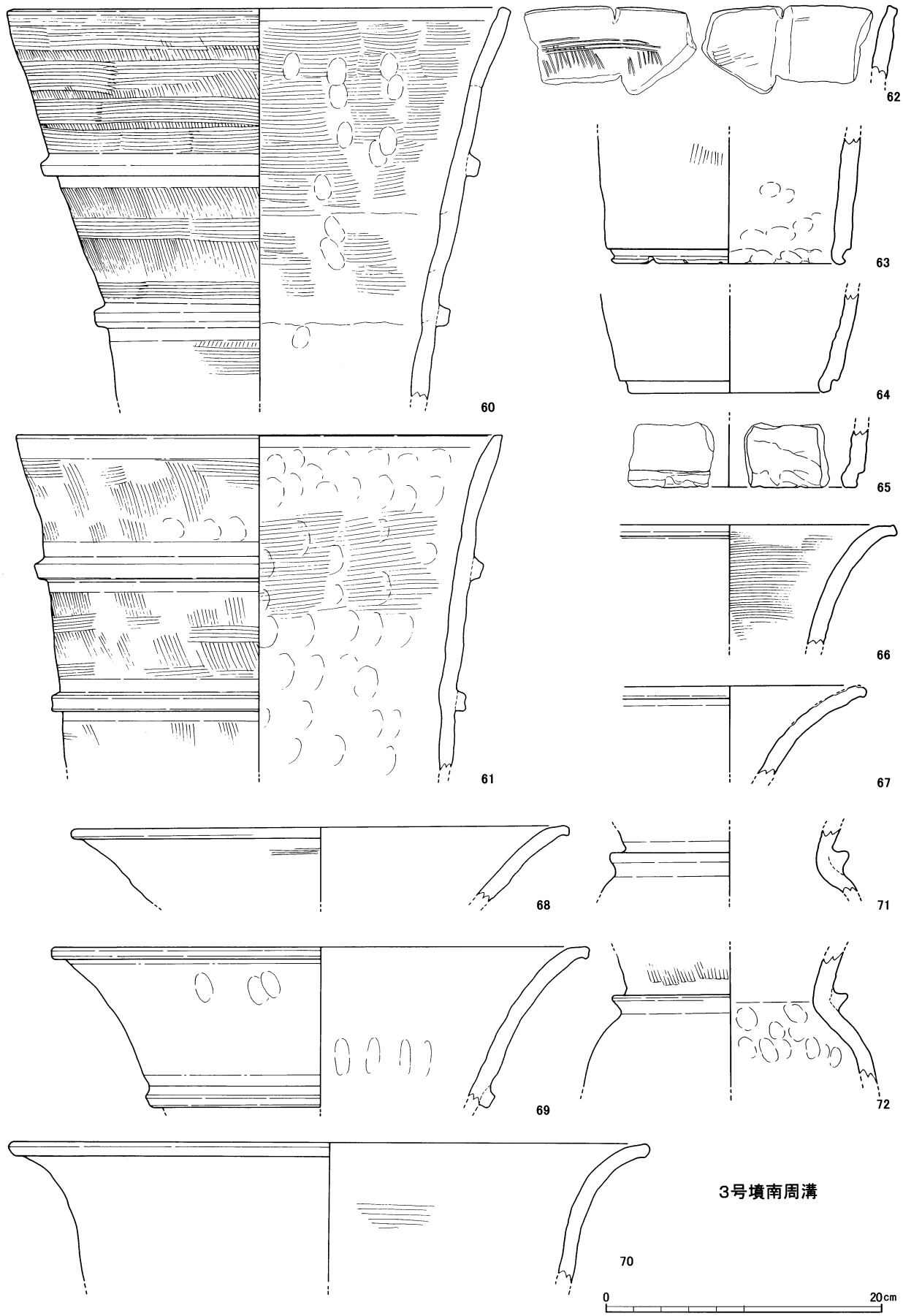
第13図　３号墳南周溝出土遺物実測図（１：４）



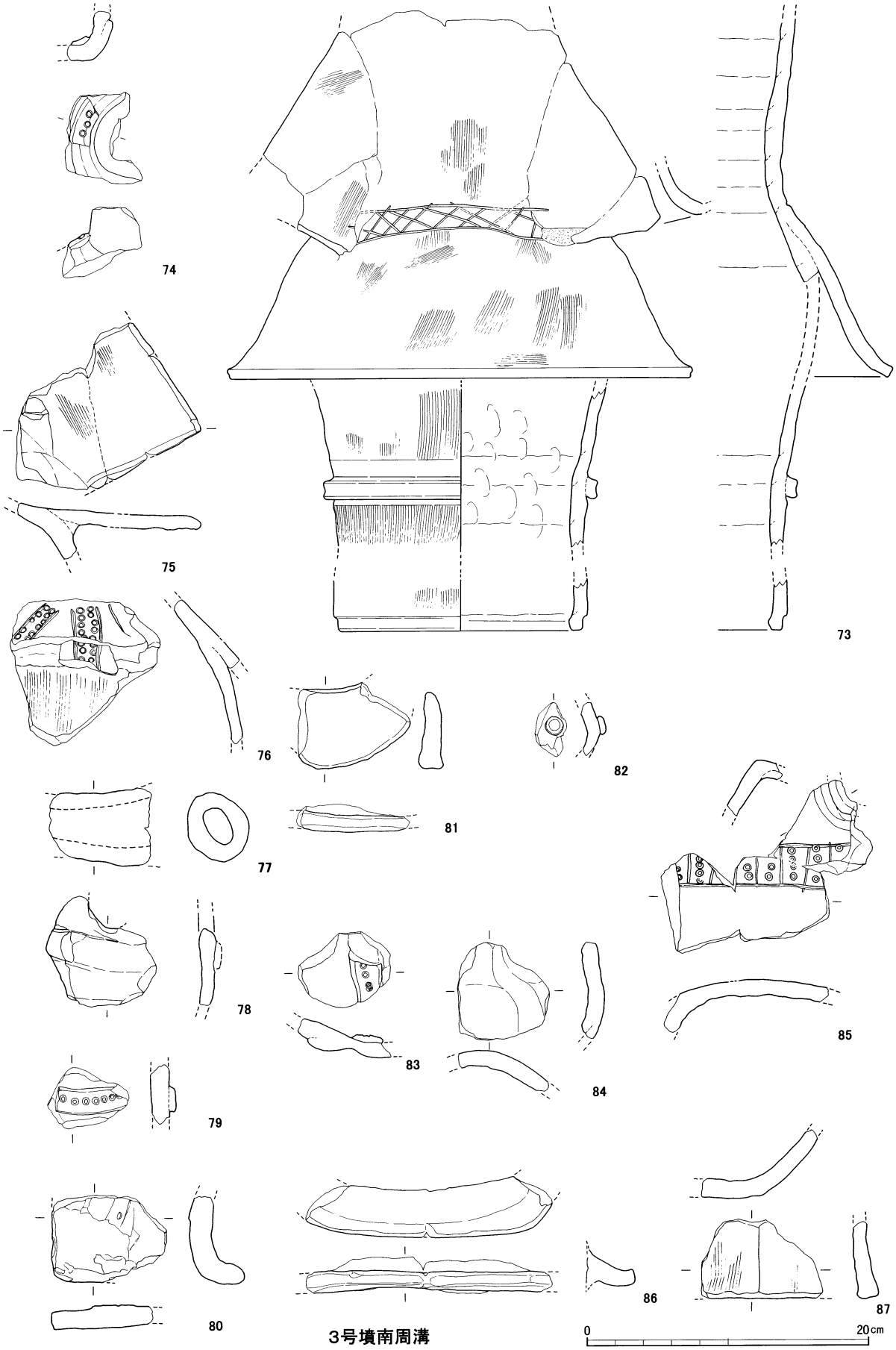
第14図　３号墳南周溝出土遺物実測図（１：４）



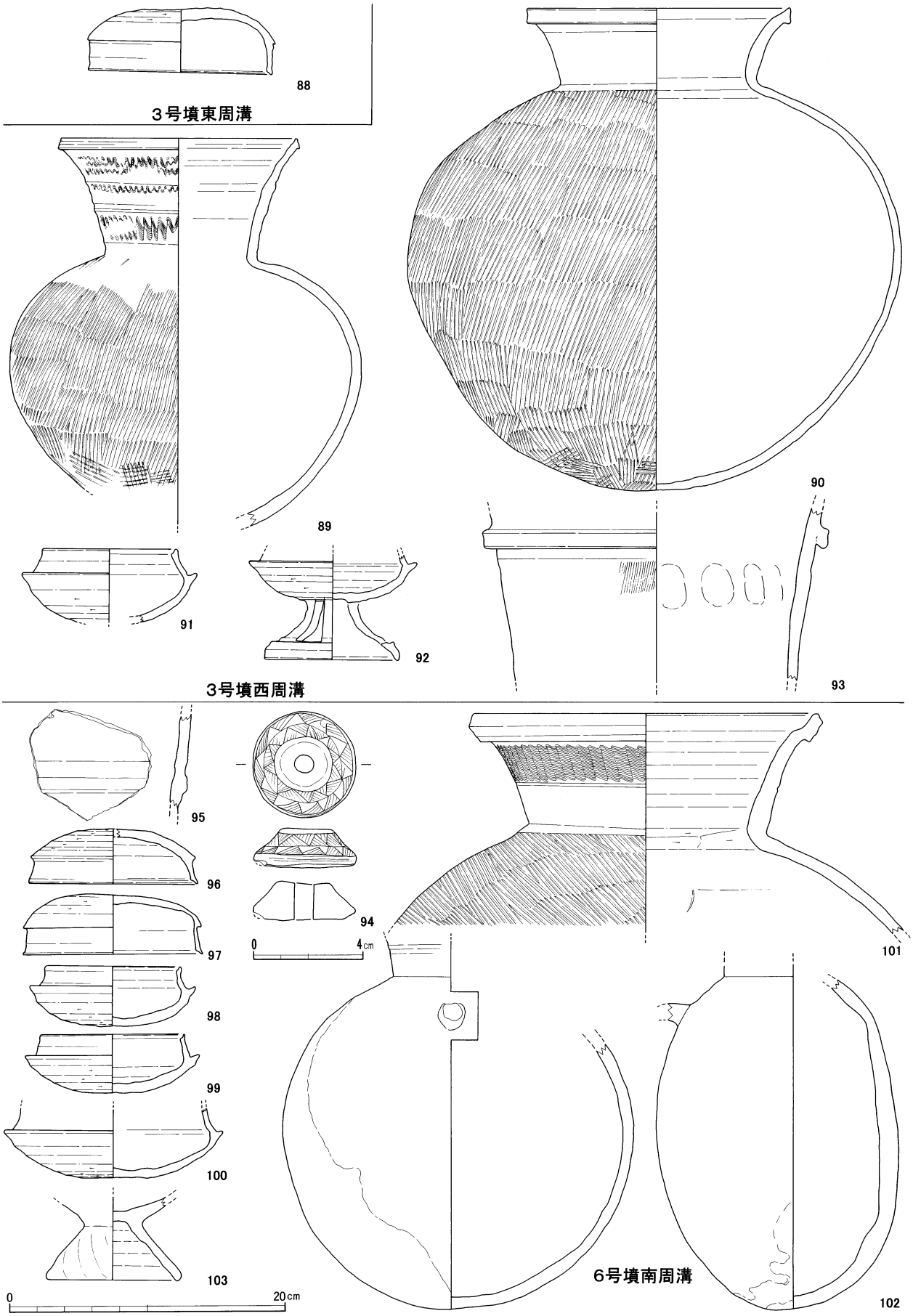
第15図　３号墳南周溝出土遺物実測図（１：４）



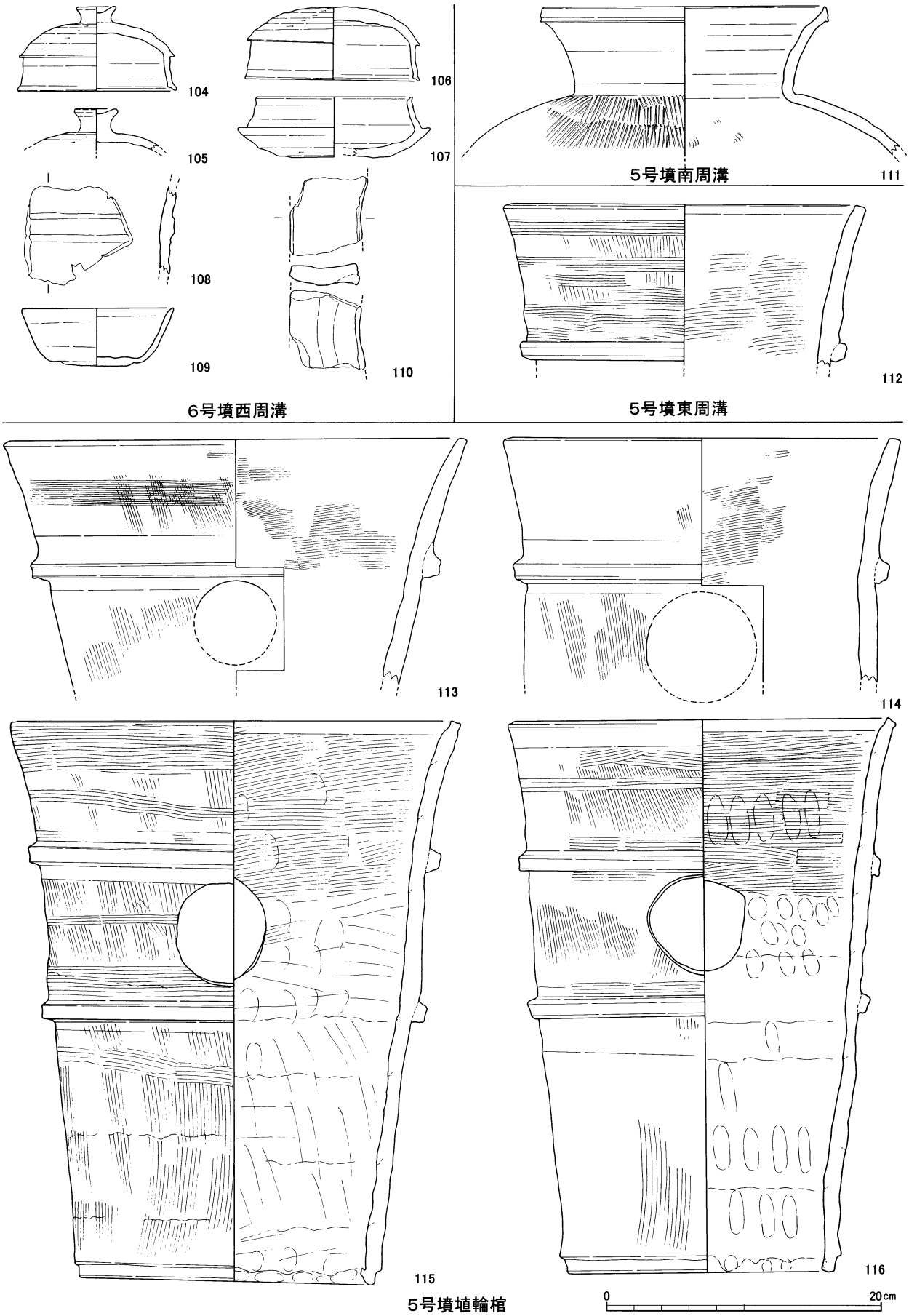
第16図　３号墳南周溝出土遺物実測図（１：４）



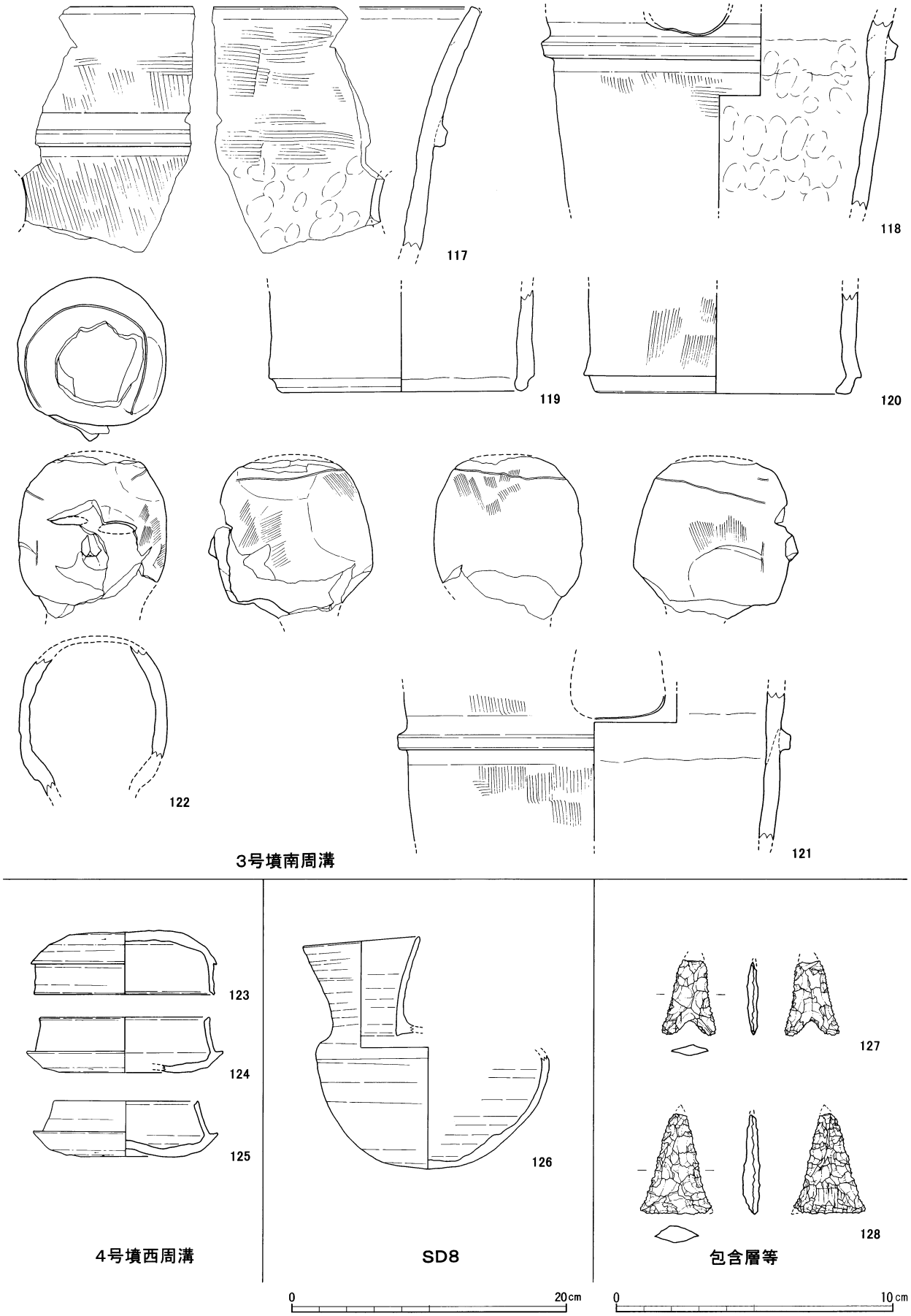
第17図　３号墳南周溝出土遺物実測図（１：４）



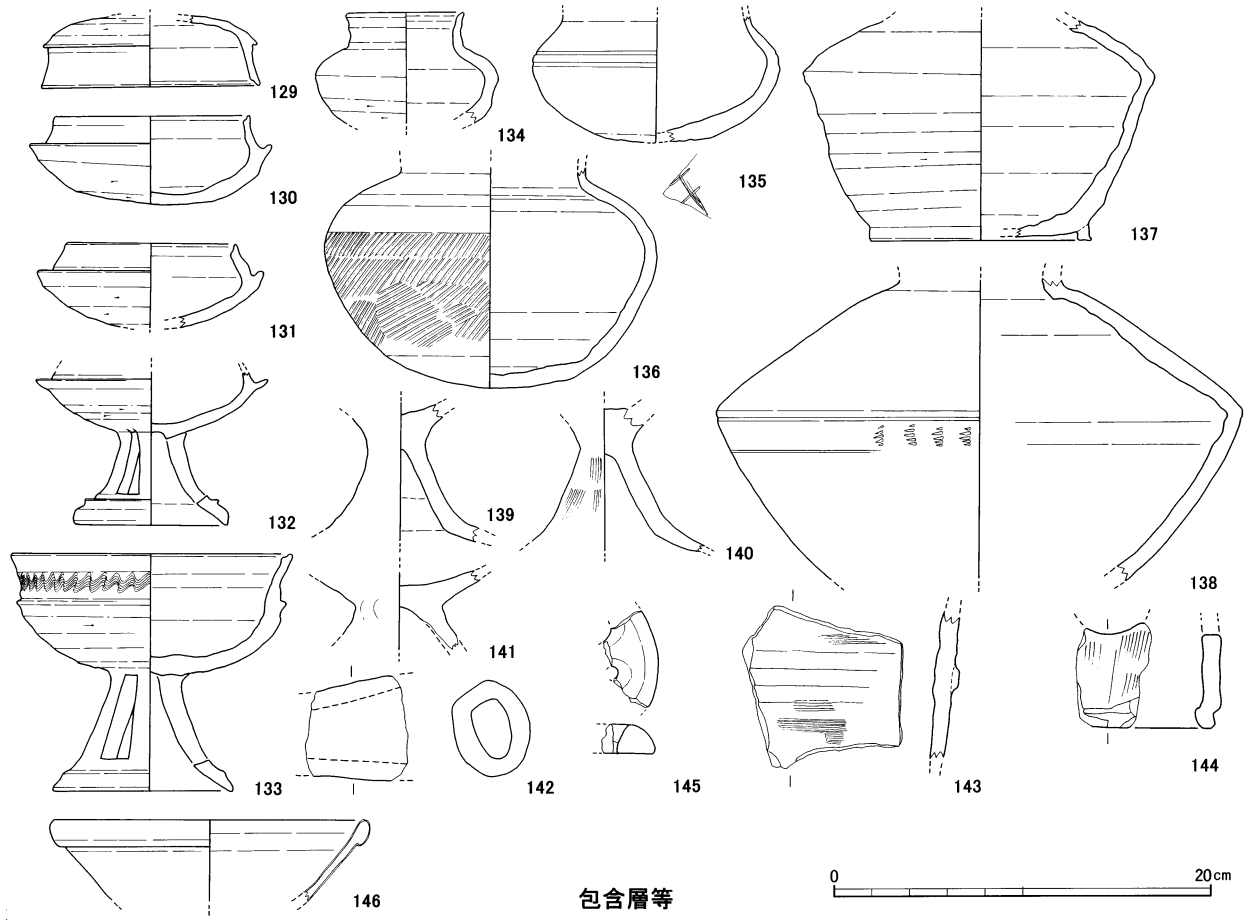
第18図　３号墳東・西周溝、６号墳南周溝出土遺物実測図（１：４、94は１：２）



第19図　６号墳西周溝、５号墳南・東周溝・埴輪棺出土遺物実測図（１：４）



第20図　３号墳南周溝、４号墳西周溝、ＳＤ８、包含層等出土遺物実測図（１：４、127・128は１：２）



第21図　包含層等出土遺物実測図（1：4）

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整・技法の特徴	胎　土	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	口径	器高					
1	006-2	須恵器 杯蓋	C4	2号墳 南周溝	13.5	5.0	天井部9/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	外:明灰ｵﾘｰﾌﾞ 5GY7/1 内:灰N5/	口縁部 3/12	
2	007-4	須恵器 杯蓋	C4	2号墳 南周溝	13.4	4.7	天井部9/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	灰N6/	口縁部 1/12強	
3	006-1	須恵器 杯蓋	C4	2号墳 南周溝	13.4	4.3	天井部9/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～3mm砂粒含	外:灰5Y6/1・ 灰白5Y7/1 内:浅黄2.5Y7/4	口縁部 3/12	
4	006-3	須恵器 杯蓋	C4	2号墳 南周溝	13.4		天井部8/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	灰N5/・ 灰白7.5Y7/1	口縁部 6/12	
5	006-6	須恵器 杯身	C4	2号墳 南周溝	11.6		底部8/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	外:灰10Y4/1・ 灰7.5Y6/1 内:灰7.5Y6/1	口縁部 小片	
6	006-5	須恵器 杯身	C4	2号墳 南周溝	11.7	4.7	底部9/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～2mm砂粒含	灰7.5Y6/1・ 灰N4/	口縁部 4/12	
7	006-7	須恵器 杯身	C4	2号墳 南周溝	12.6	4.9	底部8/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	外:ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1・ 灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	口縁部 4/12	
8	007-1	須恵器 杯身	C4	2号墳 南周溝	11.8	5.3	底部8/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	外:灰5Y4/1 内:灰白5Y7/1	口縁部 小片	自然釉
9	007-3	須恵器 杯身	C3	2号墳 南周溝	11.3		底部4/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	灰7.5Y6/1	口縁部 2/12弱	
10	012-3	須恵器 杯蓋	D3	2号墳 南周溝	12.9	5.7	天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～1mm砂粒含	灰N4/0・ 灰N6/0・ 灰白N8/0	口縁部 6/12	
11	003-2	須恵器 小壺	C4	2号墳 南周溝	10.2	10.6	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～5mm砂粒含	灰N6/0・ 灰白N7/0	口縁部 8/12	
12	005-1	須恵器 小壺	C4	2号墳 南周溝	10.4	10.3	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～5mm砂粒含	灰N4/0・ 灰赤10R5/2	口縁部 7/12	ﾍﾗ記号
13	013-2	土師器 台付甕	C4	2号墳 南周溝	台径 9.0		摩滅のため 調整不明	やや粗 ～3mm砂粒含	浅黄橙 7.5YR8/4・ 灰N4/0	台部 3/12	
14	040-3	円筒埴輪	G8	2号墳 南周溝			外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	やや密 ～2mm砂粒含	にぶい褐 7.5YR5/4・ にぶい黄橙 10YR6/4	底部 小片	底部 淡輪技法
15	001-3	須恵器 有蓋高杯 蓋	G8	3号墳 南周溝	12.0	6.0	天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗 ～5.3mm小石含	灰白2.5Y8/1・ 灰黄2.5Y7/2	口縁部 9/12	
16	010-2	須恵器 有蓋高杯 蓋	G8	3号墳 南周溝	11.2	6.0	天井部8/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～3mm砂粒含	灰白5Y7/1	口縁部 6/12	
17	010-3	須恵器 有蓋高杯 蓋	G8	3号墳 南周溝	11.1	6.1	天井部8/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗 ～6mm小石含	灰白7.5Y7/1・ 灰7.5Y6/1	口縁部 8/12	自然釉
18	001-4	須恵器 有蓋高杯 蓋	HG8	3号墳 南周溝	11.8	7.0	天井部9/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～1.5mm砂粒含	ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1・ 灰白5Y7/1	口縁部 11/12	
19	008-6	須恵器 有蓋高杯 蓋	G8	3号墳 南周溝	11.1	5.8	天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～3mm砂粒多含	灰白N7/	口縁部 4/12	
20	008-5	須恵器 有蓋高杯 蓋	G8	3号墳 南周溝	12.4	5.2	天井部8/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～2.5mm砂粒含	明ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY7/1	口縁部 2/12	
21	008-4	須恵器 有蓋高杯 蓋	G8	3号墳 南周溝	14.1	5.0	天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～3mm砂粒含	灰白N7/	口縁部 4/12	自然釉
22	004-2	須恵器 有蓋高杯	H8	3号墳 南周溝	9.3	9.0	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・ ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや粗 ～2mm砂粒含	灰N6/0	口縁部 5/12弱	
23	001-6	須恵器 有蓋高杯	G8	3号墳 南周溝	9.4	9.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～1.6mm砂粒含	灰白5Y8/1・ 灰白5Y7/1	口縁部 6/12	
24	005-5	須恵器 有蓋高杯	G8	3号墳 南周溝	9.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～2mm砂粒含	灰白N7/0・ 灰N4/0	口縁部 完存	
25	009-4	須恵器 有蓋高杯	G8	3号墳 南周溝	11.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～1.5mm砂粒含	灰白N7/	口縁部 3/12	

第１表　出土遺物観察表①

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整・技法の特徴	胎　土	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	口径	器高					
26	009-2	須恵器 有蓋高杯	G8	3号墳 南周溝	11.7	8.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・ ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや粗 ～4.5mm小石含	灰N6/	口縁部 2/12	
27	011-2	須恵器 有蓋高杯	G8	3号墳 南周溝	12.3		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・ ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや粗 ～4mm砂粒含	灰白7.5Y7/1・ 灰7.5Y6/1・ N5/0	口縁部 2/12	
28	003-5	須恵器 無蓋高杯	G8	3号墳 南周溝	台径 8.8		波状文・ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・ｽｶｼ	やや粗 ～2mm砂粒含	灰白N7/0・ 灰N6/0	台部 完存	自然釉
29	001-5	須恵器 高杯or 脚付 短頸壺	H8	3号墳 南周溝	8.2	9.6	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～1mm砂粒含	黒2.5Y2/1・ 灰白N7/	口縁部 完存	自然釉
30	009-3	須恵器 高杯	G8	3号墳 南周溝		脚径 8.4	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・ ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや密 ～3mm砂粒含	灰N6/	脚部 10/12	
31	014-2	須恵器 高杯	G8	3号墳 南周溝	底径 9.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや密 ～0.5mm砂粒含	灰N6/・灰N5/	底部 6/12	
32	008-2	須恵器 瓏	G8	3号墳 南周溝	13.4		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・波状文	密	灰N4/	口縁部 3/12	自然釉
33	002-1	須恵器 瓏	H8	3号墳 南周溝	底径 4.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・刺突痕・ ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～2.3mm砂粒含	灰N4/・暗灰N3/・ 灰N5/	底部 8/12	
34	019-1	須恵器 高杯形 器台	G8	3号墳 南周溝	40.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・沈線・波状文・ ﾀﾀｷ・ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや密	外:灰N6/ 内:灰N5/	口縁部 2/12	
35	003-4	須恵器 筒形器台	G8	3号墳 南周溝	台径 18.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・刺突・沈線・ ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・波状文	やや密	灰N6/0・ 灰白N7/0	台部 4/12	
36	036-1	須恵器 高杯形 器台	F8	3号墳 南周溝	底径 17.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・沈線・波状文	やや密 ～1.3mm砂粒含	灰白2.5Y7/1・ 灰白N7/	底部 6/12	
37	030-2	須恵器 甕	G8	3号墳 南周溝	19.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ	密	灰7.5Y6/1	口縁部 8/12	
38	030-1	須恵器 甕	G8	3号墳 南周溝	17.0		外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・工具ﾅﾃﾞ	密	灰5Y6/1	口縁部 9/12	
39	032-1	須恵器 甕	G8	3号墳 南周溝	19.0	32.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・工具ﾅﾃﾞ	やや粗	外:灰N4/・灰N5/ 内:灰N6/	口縁部 9/12	
40	048-1	須恵器 甕	G8	3号墳 南周溝	19.3	33.8	外面:ﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ 内面:ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ	やや密 ～1mm砂粒含	灰黄褐10YR6/2・ 灰白5Y7/1・ 灰N6/	口縁部 3/12	
41	027-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	34.2		外面:ﾀﾃﾊｹ・ﾖｺﾊｹ・ 突帯 ・透孔 内面:ｵｻｴ・ﾖｺﾊｹ	密	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 小片	土師質
42	044-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	35.2		ﾅﾃﾞ	やや密 ～4.3mm小石含	にぶい橙 7.5YR7/4・ 橙7.5YR6/6	口縁部 3/12	土師質
43	043-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	32.0		ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾊｹ	粗 ～4.5mm小石含	橙7.5YR7/6・ にぶい褐 7.5YR5/3	口縁部 2/12	土師質
44	047-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	30.2		外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ	やや密 ～9mm小石含	浅黄橙10YR8/4・ にぶい黄褐 10YR5/3・ にぶい黄褐 10YR5/4	口縁部 2/12弱	土師質
45	044-3	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	32.0		外面:ﾖｺﾊｹ→ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ→ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	やや密 ～8mm砂粒含	にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部 小片	土師質
46	043-2	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	28.0		ﾅﾃﾞ?	粗 ～3.6mm小石含	にぶい褐 7.5YR5/4・ 浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部 2/12強	土師質
47	044-2	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	28.0		外面:ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ→ｵｻｴ	やや粗 ～6.5mm小石含	橙7.5YR7/6・ にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 2/12弱	土師質
48	041-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	28.0		外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ→ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	やや粗 ～2.5mm砂粒含	橙7.5YR6/6	口縁部 2/12弱	土師質

第２表　出土遺物観察表②

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整･技法の特徴	胎　土	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	口径	器高					
49	040-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	30.6		外面:ﾅﾃﾞ･ 突帯貼付後ﾅﾃﾞ 内面:摩滅の為不明瞭	粗 ～8mm小石粒含	にぶい橙 7.5YR7/4･ にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12弱	土師質
50	025-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	36.5		外面:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ→工具ﾅﾃﾞ	やや密	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 6/12	土師質
51	028-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	35.1		外面:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ 内面:ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	やや密	橙7.5YR6/6	口縁部 小片	土師質
52	020-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	33.2	37.7	外面:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ 内面:ﾊｹﾒ･ｵｻｴ･ 工具ﾅﾃﾞ	やや密	浅黄橙10YR8/4･ にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 小片	土師質 底部 淡輪技法
53	022-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	33.3	41.6	外面:ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ･ｵｻｴ	粗 ～4.5mm小石砂含	にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部 4/12	土師質 底部 淡輪技法
54	023-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	32.8	42.3	外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾅﾃﾞ･ｵｻｴ	やや粗 ～3mm砂粒含	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12強	土師質 底部 淡輪技法
55	024-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	31.8	43.0	外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ･ｵｻｴ	やや密 ～2.5mm砂粒含	明黄褐10YR6/6	口縁部 2/12	土師質 底部 淡輪技法
56	041-3	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	底径 18.7		外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ	やや密 ～1.5mm砂粒含	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 2/12	土師質 底部 淡輪技法
57	042-2	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	底径 21.0		摩滅の為調整不明	やや粗 ～3mm砂粒含	浅黄橙10YR8/4･ にぶい黄橙 10YR6/4	底部 2/12弱	土師質 底部 淡輪技法
58	040-2	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	底径 18.7		外面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ 内面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ	やや粗 ～4mm砂粒含	にぶい橙 7.5YR6/4	底部 2/12強	土師質 底部 淡輪技法
59	042-3	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	底径 21.0		外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ	やや粗 ～3mm砂粒含	にぶい黄橙 10YR6/4	底部 2/12	土師質 底部 淡輪技法
60	021-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	36.5		外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾊｹ･ｵｻｴ	粗 ～5mm小石砂含	橙7.5YR6/6	口縁部 8/12	土師質
61	026-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	35.2		外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ｵｻｴ･ﾖｺﾊｹ	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4･ 橙7.5YR7/6	口縁部 3/12	土師質
62	047-2	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	30.2		外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ	やや密 ～9mm小石含	浅黄橙10YR8/4･ にぶい黄褐 10YR5/3･ にぶい黄褐 10YR5/4	口縁部 2/12弱	土師質
63	042-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	底径 17.0		外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ	やや粗 ～2.5mm砂粒含	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 4/12	土師質
64	046-1	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	底径 14.6		ﾅﾃﾞ	密～5.5mm小石含	浅黄橙10YR8/4	底部 小片	土師質
65	042-4	円筒埴輪	G8	3号墳 南周溝	底径 21.0		外面:調整不明瞭 内面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ	やや粗 ～2.5mm砂粒含	橙7.5YR7/6	底部 2/12弱	土師質
66	033-3	朝顔形 埴輪	G8	3号墳 南周溝	40.0		外面:ﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾊｹ	やや粗 ～3mm砂粒含	にぶい褐 7.5YR5/4･ にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 小片	土師質
67	033-2	朝顔形 埴輪	G8	3号墳 南周溝	37.0		摩滅の為調整不明瞭	粗 ～4mm砂粒含	浅黄橙10YR8/4･ にぶい黄褐 10YR5/4	口縁部 小片	土師質
68	043-3	朝顔形 埴輪	G8	3号墳 南周溝	36.0		摩滅の為調整不明瞭	やや粗 ～3.7mm小石含	にぶい黄褐 10YR4/3	口縁部 1/12	土師質
69	031-1	朝顔形 埴輪	G8	3号墳 南周溝	39.0		外面:ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ･ｵｻｴ	粗 ～3mm砂粒多含	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 3/12	土師質
70	033-1	朝顔形 埴輪	G8	3号墳 南周溝	36.5		摩滅の為調整不明瞭	粗 ～5mm砂粒含	浅黄橙10YR8/4･ 橙7.5YR7/6･ 明黄褐10YR7/6	口縁部 2/12強	土師質
71	046-2	朝顔形 埴輪	G8	3号墳 南周溝			ﾅﾃﾞ	やや密 ～3mm砂粒含	浅黄橙10YR8/4		土師質

第３表　出土遺物観察表③

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整･技法の特徴	胎　土	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	口径	器高					
72	034-2	朝顔形埴輪	G8	3号墳 南周溝			外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾅﾃﾞ･ｵｻｴ	粗 ～5mm砂粒含	にぶい橙 7.5YR6/4		土師質
73	049-1	人物埴輪	F8	3号墳 南周溝			外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾅﾃﾞ･ｵｻｴ	やや粗 ～2mm砂粒含	橙5YR6/6		土師質
74	052-1	人物埴輪	G8	3号墳 南周溝			外面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ 内面:竹管文	やや密 ～1.5mm砂粒含	橙5YR6/3		土師質
75	051-1	人物埴輪	G8	3号墳 南周溝			外面:ﾊｹﾒ 内面:ﾅﾃﾞ･ｵｻｴ	やや密 ～3mm砂粒含	橙5YR6/6･ 橙7.5YR6/6		土師質 有黒斑
76	052-5	人物埴輪	G8	3号墳 南周溝			外面:竹管文→ﾊｹﾒ	やや粗 ～2.5mm砂粒含	橙5YR6/6･ 橙7.5YR7/6･ 橙7.5YR6/6		土師質
77	045-4	人物埴輪	G8	3号墳 南周溝				やや粗 ～5.5mm小石含	にぶい褐 7.5YR5/4･ 浅黄橙 7.5YR8/4		土師質
78	052-3	人物埴輪	G8	3号墳 南周溝				やや密 ～1.5mm砂粒含	橙5YR6/6		土師質
79	052-2	人物埴輪	F8	3号墳 南周溝			外面:竹管文	やや粗 ～2mm砂粒含	橙7.5YR6/6		土師質
80	050-4	人物埴輪	G8	3号墳 南周溝			外面:線刻 内面:ｵｻｴ･ﾅﾃﾞ	やや密 ～1.5mm砂粒含	橙5YR6/6･ にぶい橙5YR6/4		土師質
81	050-3	形象埴輪	G8	3号墳 南周溝			ﾅﾃﾞ	やや粗 ～2.5mm砂粒含	にぶい橙 7.5YR6/4		土師質
82	052-4	形象埴輪	F8	3号墳 南周溝				やや密 ～2mm砂粒含	橙5YR6/6		土師質
83	052-6	形象埴輪	F8	3号墳 南周溝			外面:竹管文	やや粗 ～3mm砂粒含	橙5YR6/6		土師質
84	051-3	形象埴輪	F8	3号墳 南周溝			外面:ﾅﾃﾞ 内面:ｵｻｴ	やや密 ～2mm砂粒含	橙7.5YR6/6		土師質
85	051-2	形象埴輪	G8	3号墳 南周溝			外面:ﾅﾃﾞ 内面:ｵｻｴ	やや密 ～3mm砂粒含	橙5YR6/6		土師質
86	050-2	形象埴輪	G8	3号墳 南周溝			ﾅﾃﾞ	やや粗 ～3mm砂粒含	橙7.5YR7/6		土師質
87	050-1	形象埴輪	G8	3号墳 南周溝			外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾅﾃﾞ	やや密 ～2.5mm砂粒含	橙7.5YR7/6		土師質
88	003-1	須恵器 杯蓋	H6	3号墳 東周溝	13.5	4.8	天井部9/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～2mm砂粒含	灰白N7/0･ 灰N6/0	口縁部 4/12	
89	014-1	須恵器 壺	F8	3号墳 西周溝	17.1		外面:波状文･ﾀﾀｷ 内面:ﾅﾃﾞ	やや密 ～1.7mm砂粒含	灰白N5/･ 灰白N8/	口縁部 6/12	
90	016-1	須恵器 甕	F8	3号墳 西周溝	19.2	35.1	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ･ﾀﾀｷ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ･ﾅﾃﾞ	やや密	灰10Y6/1･ 灰白10Y7/1	口縁部 4/12	
91	009-5	須恵器 杯身	F8	3号墳 西周溝	9.9		底部9/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～3.5mm砂粒多含	浅黄2.5Y7/3	口縁部 4/12	
92	009-1	須恵器 有蓋高杯	F8	3号墳 西周溝	鍔径 12.2	脚径 9.8	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ･ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ･ 三方ｽｶｼ	やや粗 ～4mm砂粒多含	灰N6/	脚部 6/12	
93	045-2	円筒埴輪	F8	3号墳 西周溝			外面:ﾅﾃﾞ→ﾀﾃﾊｹ	やや密 ～4.2mm小石含	橙7.5YR6/6		
94	003-3	紡錘車	H3	6号墳 南周溝	底径 3.9	1.4					滑石製
95	046-6	円筒埴輪	J3	6号墳 南周溝			ﾅﾃﾞ	やや密 ～2.2mm砂粒含	橙5YR7/6		
96	005-3	須恵器 杯蓋	K3	6号墳 南周溝	12.3	4.0	天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～2mm砂粒含	外面:灰10Y5/1･ 灰10Y6/1･ 灰白10Y7/1 内面:灰N6/0	口縁部 3/12	
97	001-2	須恵器 杯蓋	K4	6号墳 南周溝	13.0	4.3	天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～3mm砂粒含	灰白N7/		
98	005-8	須恵器 杯身	J4	6号墳 南周溝	10.0		底部2/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～3.5mm砂粒含	外面:灰7.5Y5/1･ 灰7.5Y4/1･ ｵﾘｰﾌﾞ黒 7.5Y3/1 内面:灰N6/0	口縁部 6/12	自然釉

第４表　出土遺物観察表④

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整・技法の特徴	胎　土	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	口径	器高					
99	005-7	須恵器 杯身	L3	6号墳 南周溝	10.6		底部2/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗 ～3mm砂粒含	灰N6/0	口縁部 6/12	
100	011-4	須恵器 杯身	J3	6号墳 南周溝	受部 15.9		底部7/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～1.5mm砂粒含	灰N6/0	受部 3/12	
101	029-1	須恵器 甕	J3	6号墳 南周溝	25.7		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・波状文・ﾀﾀｷ	やや密	灰白10Y7/1	口縁部 6/12	
102	015-1	須恵器 提瓶	K3	6号墳 南周溝			ﾅﾃﾞ	やや密 ～3.2mm砂粒含	灰白5Y7/1・ 灰5Y6/1		自然釉
103	013-1	土師器 S字甕	J4	6号墳 南周溝	台径 10.0		ﾅﾃﾞ	やや粗 ～3mm砂粒含	橙5YR6/6	台部 完存	
104	005-4	須恵器 有蓋高杯 蓋	F3	6号墳 西周溝	10.5	6.1	天井部9/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～4mm砂粒含	灰白5Y7/1・ N7/0	口縁部 小片	自然釉
105	008-3	須恵器 有蓋高杯 蓋	F3	6号墳 西周溝	ﾂﾏﾐ 3.2		ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～1.5mm砂粒少含	灰N6/	ﾂﾏﾐ部 6/12	
106	005-2	須恵器 杯蓋	H2	6号墳 西周溝	12.6	5.3	天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～2mm砂粒含	外面:灰黄2.5Y6/2 内面:灰白5Y7/1	口縁部 10/12強	
107	005-9	須恵器 杯身	F3	6号墳 西周溝	11.4		底部8/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～1.5mm砂粒含	灰N6/0	口縁部 3/12	
108	046-7	円筒埴輪	I3	6号墳 西周溝			ﾅﾃﾞ	やや密 ～2.5mm砂粒含	橙5YR7/6		土師質
109	012-4	土師器 杯	D3	6号墳 西周溝	11.7	4.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・糸切痕	やや粗 ～2mm砂粒含	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 8/12	
110	046-4	人物埴輪	I3	6号墳 西周溝				やや密 ～3.5mm砂粒含	橙7.5YR7/6		土師質
111	011-1	須恵器 甕	H13	5号墳 南周溝	20.9		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ	やや密 ～2.5mm砂粒含	外面:黄灰2.5Y5/1 内面:灰5Y6/1	口縁部 6/12	
112	041-2	円筒埴輪	G9	5号墳 東周溝	26.5		外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾊｹ	粗 ～5mm砂粒含	橙7.5YR6/6・ 明褐7.5YR5/6	口縁部 2/12弱	土師質
113	039-1	円筒埴輪	F9	5号墳 埴輪棺	33.6		外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ	やや粗 ～4.5mm小石含	にぶい褐 7.5YR5/4・ 橙7.5YR6/6	口縁部 3/12	土師質
114	037-1	円筒埴輪	F9	5号墳 埴輪棺	29.0		外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ	粗 ～5.3mm小石含	橙7.5YR7/6・ 橙7.5YR6/6	口縁部 2/12弱	土師質
115	017-1	円筒埴輪	F9	5号墳 埴輪棺	32.5	40.8	外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ・工具ﾅﾃﾞ・ ｵｻｴ	やや密	浅黄橙10YR8/4・ 橙7.5YR8/6	口縁部 10/12	土師質
116	018-1	円筒埴輪	F9	5号墳 埴輪棺	28.2	40.2	外面:ﾀﾃﾊｹ→C種ﾖｺﾊｹ 内面:ｵｻｴ・ﾖｺﾊｹ・ 工具ﾅﾃﾞ	粗 ～4.5mm小石砂含	橙7.5YR7/6	口縁部 完存	土師質
117	035-1	人物埴輪	F9	3号墳 南周溝	30.0		外面:ﾖｺﾊｹ・ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾖｺﾊｹ・ｵｻｴ	やや粗 ～8mm砂粒含	にぶい黄橙 10YR7/4		土師質
118	034-1	円筒埴輪	F9	3号墳 南周溝	胴部 24.0		外面:ﾀﾃﾊｹ・ﾖｺﾊｹ 内面:ｵｻｴ	粗 ～6mm小石砂粒含	浅黄橙10YR8/4・ にぶい黄橙 10YR7/4	胴部 3/12	土師質
119	047-3	円筒埴輪	F9	3号墳 南周溝	底径 18.2		外面:調整不明 内面:工具ﾅﾃﾞ	やや粗 ～2.5mm砂粒含	橙7.5YR6/6・ 浅黄橙10YR8/4	底部 3/12	土師質 底部 淡輪技法
120	047-4	円筒埴輪	F9	3号墳 南周溝	底径 19.6		外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾅﾃﾞ	粗 ～7mm小石含	浅黄橙7.5YR8/4	底部 1/12強	土師質 底部 淡輪技法
121	045-1	円筒埴輪	F9	3号墳 南周溝			外面:ﾀﾃﾊｹ 内面:ﾅﾃﾞ	粗 ～8.5mm小石含	にぶい橙 7.5YR6/4		土師質
122	038-1	人物埴輪	F9	3号墳 南周溝			ﾊｹﾒ	やや粗 ～3.8mm小石含	橙7.5YR7/6・ にぶい橙 7.5YR7/4		土師質 有黒斑
123	012-2	須恵器 杯蓋	B3	4号墳 西周溝	13.1	4.7	天井部9/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～2mm砂粒含	灰白N7/0・ 灰N6/0	口縁部 5/12弱	
124	007-2	須恵器 杯身	B3	4号墳 西周溝	12.3	4.0	底部8/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～1.5mm砂粒含	灰10Y6/1	受部 3/12	

第５表　出土遺物観察表⑤

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整・技法の特徴	胎　土	色　調	残存度	備　考
			地区	遺構	口径	器高					
125	006-8	須恵器 杯身	B3	4号墳 西周溝	10.5	4.0	底部9/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	密	灰7.5Y6/1・ 灰N6/1	口縁部 2/12	
126	002-2	須恵器 平瓶	I12	SD8		16.8	ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～1.5mm砂粒含	灰黄2.5Y7/2・ 浅黄2.5Y7/3		
127	053-1	打製石鏃	F5	包含層	残長 2.65	残幅 1.90		サヌカイト			3号墳 北周溝 混入 残重1.6g
128	053-2	打製石鏃	G9	包含層	残長 3.60	幅 2.55		サヌカイト			4号墳 北周溝 混入 残重4.0g
129	006-4	須恵器 杯蓋	E2	包含層	11.6		天井部10/12 ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密	外面:灰N4/ 内面:灰白7.5Y7/1		
130	001-1	須恵器 杯身	K4	包含層	10.2	4.6	底部10/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	粗 ～2.5mm砂粒含	灰白N7/・ 暗灰黄2.5Y4/2・ 黒褐2.5Y3/1		自然釉
131	011-3	須恵器 杯身	L3	包含層	9.1		底部10/12ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや密 ～2mm砂粒含	灰N5/0		
132	005-6	須恵器 有蓋高杯	D1	包含層	底径 8.1		ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや密 ～2mm砂粒含	灰白N7/0・ 灰N5/0・ 灰N4/0	底部 3/12	
133	004-1	須恵器 無蓋高杯	K4	包含層	14.9	12.5	波状文・ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ ｽｶｼﾏﾄﾞ	やや粗	灰N6/0	口縁部 10/12強	
134	009-6	須恵器 短頸壺	D7	包含層	6.2		ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ	やや粗 ～4mm小石砂多含	灰N5/0	口縁部 小片	
135	007-5	須恵器 短頸壺	E5	包含層	体部 13.0		沈線・ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ・ ﾍﾗ記号	やや密	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y6/1		自然釉
136	008-1	須恵器 甕	D3	包含層	体部 17.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ	やや密 ～1.5mm砂粒少含	灰白N7/・ 灰白N6/		
137	004-3	須恵器 長頸壺	J3	包含層	台径 11.7		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・貼付高台	やや密 ～2mm砂粒含	灰N5/0・ 灰白N8/0	台部 9/12	自然釉
138	010-1	須恵器 長頸壺	J4	包含層	頸部 8.6		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・沈線・刺突	やや粗 ～1.5mm砂粒含	灰N7/0・ 灰白5Y7/1	頸部 6/12	自然釉
139	013-4	土師器 高杯	L3	包含層			ﾅﾃﾞ	やや粗 ～2mm砂粒含	橙7.5YR7/6		
140	013-5	土師器 高杯	L3	包含層			ﾊｹﾒ(摩滅が激しい)	粗 ～5mm砂粒含	橙5YR7/6		
141	046-3	土師器 S字甕	G10	包含層			剥離ひどく調整不明	粗 ～3mm砂粒含	橙5YR6/6		
142	045-3	人物埴輪	E5	包含層				やや密 ～1.8mm砂粒含	橙7.5YR6/6		土師質
143	009-7	陶器?	D6	包含層			ﾅﾃﾞ	やや密 ～1mm砂粒少含	淡赤橙 2.5YR7/4		
144	046-5	円筒埴輪	J4	包含層			ﾊｹﾒ	やや密 ～4.8mm小石含	橙5YR7/6・ 橙5YR6/6		土師質
145	013-3	円筒埴輪	E7	包含層			ﾊｹﾒ	やや粗 ～2mm砂粒含	橙7.5YR7/6		土師質
146	012-1	白磁 椀	G8	包含層	17.0		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	灰白5Y8/1・ 灰白10Y8/1	2/12弱	

第６表　出土遺物観察表⑥

Ⅴ　まとめ

今回報告した城ノ広古墳群・城ノ広遺跡の調査は、前方後円墳を調査した朝日町教育委員会による１次調査に続く、２次調査の結果である。１次調査では、古墳時代後期の前方後円墳（１号墳）の他、律令期の掘立柱建物群なども確認されているが、２次調査の調査区では若干量の古墳時代以外の遺物も含むものの、基本的には古墳時代後期の遺構（方墳群）と遺物が主体を占める。

以下では、今回確認された古墳群とその出土遺物について、１次調査の前方後円墳の存在も勘案しながら、現時点でのまとめとその評価を示しておこう。

１　古墳群の所属時期と広がり

城ノ広古墳群と呼びうる古墳群は、丘陵南側の低い部分に１号墳（前方後円墳）があり、北側の丘陵高所に方墳群が展開する状況をとる。この１号墳と方墳群の間には、約120mの空閑地を挟む。高所の方墳群（２次調査調査分）は、北・西・東側の３方向にさらに古墳が続いていく状況を示しており、今回発掘した５基の方墳で、古墳群を構成する古墳のすべてというわけではなさそうである。つまり、城ノ広古墳群は、削平を受けて現況からは不明なものの、発掘調査による確認数である前方後円墳１基と方墳５基という古墳数を下限として、それ以上の規模で築造された古墳群であったと推定される。

方墳群では、削平のため墳丘がなくなって周溝も浅く削られた状態であったにも関わらず、周溝内からかなり多量の埴輪類と須恵器類が発掘されている。これら方墳群は、６世紀中葉以降の新しい時期の遺物も若干含んでいるものの、須恵器は基本的に短脚一段透かしの時期であり、概ね５世紀末から６世紀前葉にかけて築造された古墳であることがわかる。埴輪の所属時期も、これに矛盾しない。

こうした方墳での遺物出土状況は、同じく削平を受けた１号墳の状況とは対照的である。前方後円墳である１号墳は、埴輪類を全く含まず、６世紀中葉以降の須恵器を埋土に含んでいる。出土遺物に拠る限り、１号墳が本地域において埴輪が使用された時期の後、換言すれば埴輪をもつ高所の方墳群に後続して築造された可能性を示していることになる。[1]

しかし、前方後円墳の形状をみてみると、事態はさほど単純ではない。１号墳は、前方部の端部が不明瞭であるが、いわゆる５区型以上の定型的前方後円墳[2]の墳形を採ることは確実である。現時点では、全長36m、後円部径22m、前方部端部の幅が後円部径と同じか１区分短いくらいの５区型前方後円墳とみるのが妥当[3]で、周溝は墳丘部の形状に沿って巡り、後円部の周溝幅もほぼこの１区を基準に設定されている（北側は崩れのため幅広になっている）。また、括れ部の締まりが大きく、前方部は括れ部から外側に開き、周溝底は前方部端部側へ向かって徐々に浅くなる傾向が認められる。こうした特徴は、１号墳が前期古墳（それもいわゆる定型的前方後円墳の成立前後）とみることに調和的である。この場合、出土遺物の年代とは明らかに齟齬が生じる。

従って、１号墳については、前期古墳の可能性をより強く感じるが、取り敢えずは現在考えられている６世紀中葉という年代観に強い注意を喚起するにとどめ、その最終的な結論は、１号墳の正式報告に譲りたい。

２　群構成の特質

近年の調査事例の増大は、群集墳研究にも新たな知見をもたらしている。そのひとつが、5世紀代後半から末頃に群形成を開始する群集墳で、群中に埴輪をもつ古墳を含む群集墳についての知見である。

確かに、こうした群集墳が存在すること自体は以前より知られていた。例えば、６世紀後半代以降に群形成を開始する多くの群集墳に対し、それらに先行して群形成が始まる群集墳については、「初期群集墳」あるいは「古式群集墳」として把握されてきた経緯がある。しかし、これらが最初に術語として使用された当初は、初期群集墳の場合は具体的には奈良県新沢千塚古墳群を対象とした渡来系集団の墓域を念頭においたもの[4]で、一方、古式群集墳については、弥生時代の方形周溝墓群との系譜など「古墳」

との階層・階級的格差のなかで存在した墳墓のあり方、歴史的連続性を重視したもの[5]であった。

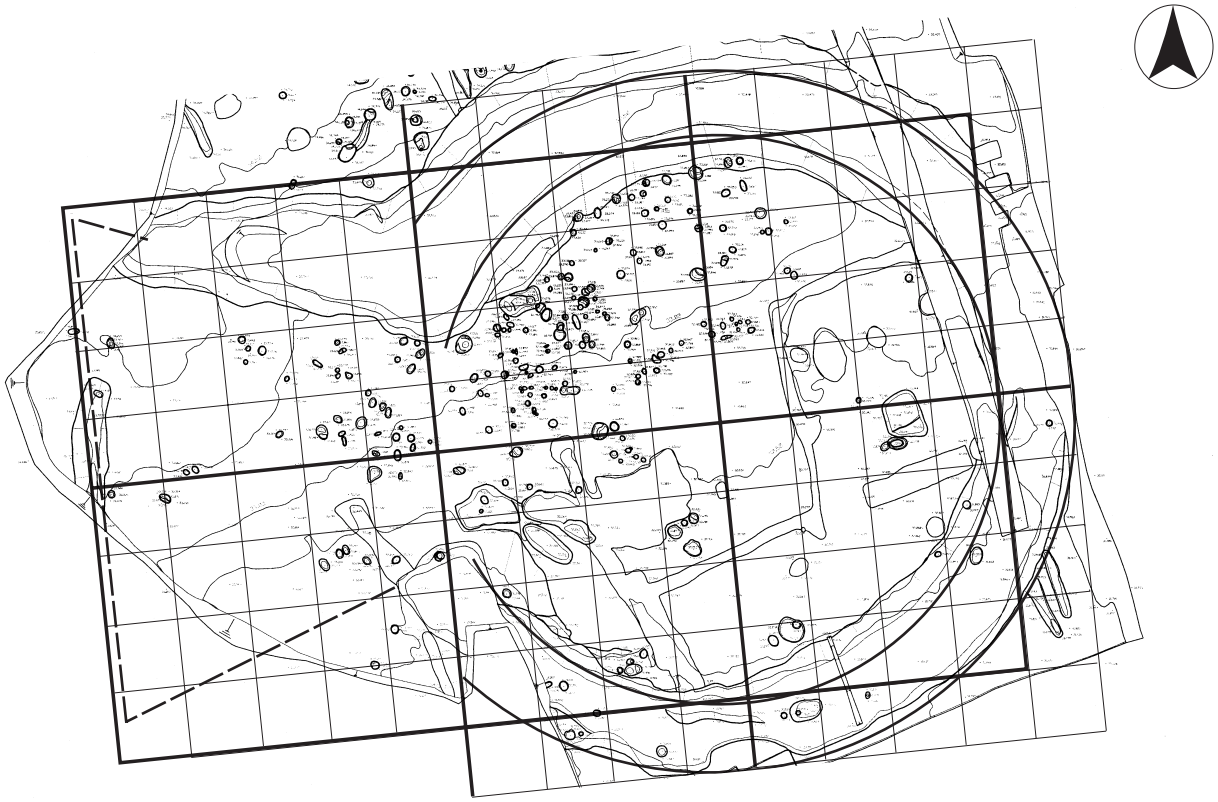
もちろん、これらの議論は、５世紀後半から末にかけて群形成を開始する群集墳－埴輪を含む古墳が含まれていたり、群中に前方後円墳を含むなど－の位置づけとも密接に関わるものではあるが、二者択一的にどちらか一方の内容に当てはめて考えようとする性格のものではない。当該の古墳群がもつ群構成、所属時期、墳形、規模、埴輪有無、副葬品の内容などから総合的に性格が詰められたうえで、概念化が図られるべきであろう。

というのも、「群集墳」という用語自体、６世紀後半代以降の爆発的に増大する（という現象として把握されていた）小規模古墳の群集状態に対して用いられたもので、「首長墳」などとの階級的対立概念を含意して用いられる[6]ことも多い。その場合、城ノ広古墳群のように群中に前方後円墳を含む場合、はたしてそれを「群集墳」という範疇で括れるのかという問題も、議論が分かれるところであろう。

城ノ広古墳群の場合、前方後円墳である１号墳の時期の位置づけによって、その意義が大きく変わる。通常、後期群集墳と前方後円墳がセットで存在する場合、平野部に近い丘陵端部に古墳群築造の契機となる前方後円墳が築造された後、背後の丘陵上に円墳や方墳といった小古墳による群集墳が形成される例が多い。例えば、奈良県新庄町の大和二塚古墳と寺口千塚古墳群の関係や、伊賀市鳴塚古墳と甲野古墳群の関係などである。しかし、城ノ広古墳群の場合、墳形から前方後円墳を著しく古く考えても、あるいは出土遺物から６世紀以降の築造を考えても、これら通例とは異なったあり方を示している。

一方、群中に埴輪をもつ古墳を含む群集墳事例は、三重県内の事例に限っても松阪市の常光坊谷古墳群[7]をはじめ、津市の稲葉古墳群[8]や鈴鹿市の寺谷古墳群[9]・石薬師東古墳群[10]など近年調査例が急増している。むしろ、伊勢の場合は、５世紀後半～末に群形成を開始する古墳群は、基本的に埴輪を保持する古墳を含むほうが一般的で、持たないほうが例外とも捉えられるだろう。

このように考えてよければ、城ノ広古墳群は、前方後円墳の扱いを留保しても、６世紀後半以降に「爆発的」増加をみせる群集墳とはあり方に質的な差異を示しているものといえよう。そして、１号墳の時期が遡るのであれば、これら群集墳被葬者は１



第22図　城ノ広１号墳の推定復原

号墳被葬者に擬制的同族意識を有し、その近傍に群構成を開始した可能性が考えられる。いずれにせよ、城ノ広古墳群の成立と展開は、旧朝明郡の政治的動向と密接に関わって、朝明川流域においてかなり重大な出来事であったと推定される。

3　出土埴輪について

最後に、城ノ広古墳群から出土した埴輪について若干のまとめを記し、終わりとしたい。

城ノ広古墳群から出土した埴輪は、円筒埴輪はすべて外面Ｃ種ヨコハケ[11]・底部淡輪技法で製作されたいわゆる「淡輪系」円筒埴輪[12]であり、形象埴輪に関しても人物埴輪の製作技術など伊勢の「淡輪系形象埴輪」特有のあり方を示すものであった[13]。埴輪の確認自体が少ない旧朝明郡にあって、淡輪系埴輪は初確認であり、淡輪系埴輪としてはこれまで伊勢の北限であった旧三重郡域の四日市市小杉大谷窯跡[14]よりもその分布範囲を大きく北へ広げた。

５世紀後半以降の伊勢の埴輪は、淡輪系と淡輪技法を用いない非淡輪系に分けて考えると理解しやすいが[15]、古墳群によっては群中の古墳毎にこれら系統が入り混じって存在している場合（しかもその量的比率にも差異がある）もある。さらに、一古墳レベルで埴輪の様相をみても、細かく見れば円筒埴輪の段構成や外面調整に差異があり、ひとつ古墳で埴輪の様相が異なる場合がある。しかし、これに対して城ノ広古墳群では、円筒埴輪の場合、法量、焼成、調整、ビルディング技術などの均質性が高く、非常にまとまりがよい。

また、２条３段構成による円筒埴輪の突帯設定は、１段目突帯を器高のほぼ中央に設定したうえでさらにその上部を均等に割った位置に２段目の突帯を貼付するいわゆる「二分割突帯」に拠っている[16]。この突帯分割法は、元来、奈良県などの例では淡輪系円筒埴輪（奈良県自体、淡輪系円筒埴輪は少ないが）ではない円筒埴輪で用いられたものである。淡輪系埴輪である城ノ広古墳群の円筒埴輪にその手法が用いられていることは、系統を超えた技術交流の存在を物語るのか、あるいはその手法自体にそうした特定製作集団による手法の固有性よりも系統を超えた普遍的手法のひとつとして考えるのか問題を提起した。今後の資料増加によって、伊勢におけるこの手法のあり方を評価していくことができるであろう。

（穂積）

註

1　朝日町教育委員会『城ノ広遺跡発掘調査現地説明会資料』2000
2　石部正志・宮川徙・堀田啓一・田中英夫「畿内大型前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89　1979
3　一号墳の実測図は、朝日町教育委員会から提供を受けた。ただし、本稿での見解は筆者の責任による想定数値であり、最終的な数値は報告書に拠られたい。
4　寺沢知子「初期群集墳の一様相」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ　1982
5　石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』四　1980
6　近藤義郎『佐良山古墳群の研究』1952
7　松阪市教育委員会『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』1990
8　津市教育委員会調査、三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』15　1979
9　鈴鹿市教育委員会『中の川流域の考古学』1993
10　三重県埋蔵文化財センター『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡』2000
11　川西宏幸「円筒埴輪総」『考古学雑誌』64－２　1978
12　鈴木敏則「伊勢の淡輪系埴輪」『Mie　history』vol.3　1991
13　穂積裕昌「伊勢の埴輪生産」『研究紀要』10　2001
14　四日市市教育委員会『小杉大谷古窯址』1974
15　前掲註13文献
16　河内一浩「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第４号　2003

朝明川と城ノ広古墳群（北から）

城ノ広古墳群全景（手前が県調査区、奥が町調査による前方後円墳）

ＰＬ２

調査区全景１（南から）

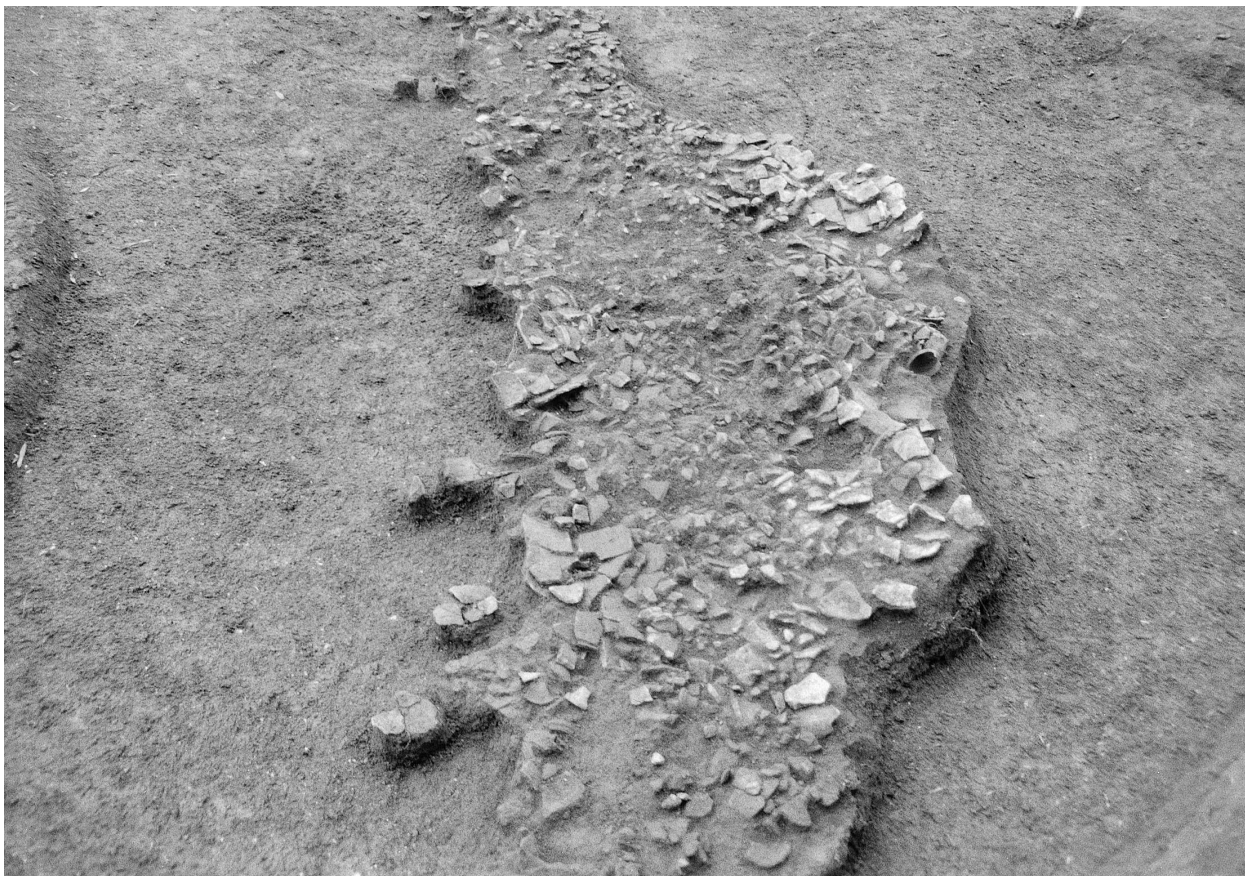
調査区全景２（東から）

２号墳周溝（北から）

３号墳（北から）

ＰＬ４

３号墳（南から）

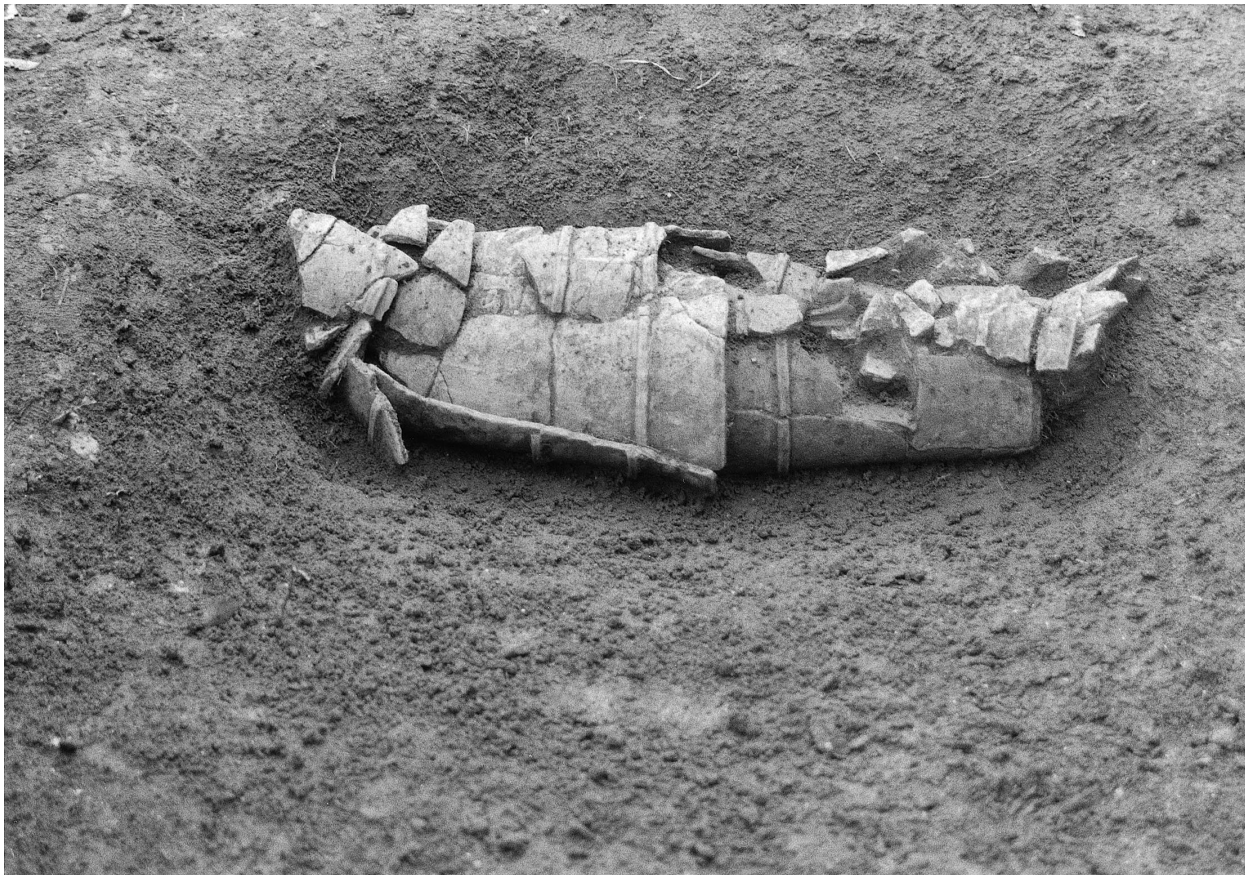


３号墳南周溝遺物出土状況（西から）

３号墳北周溝土層断面（東から）

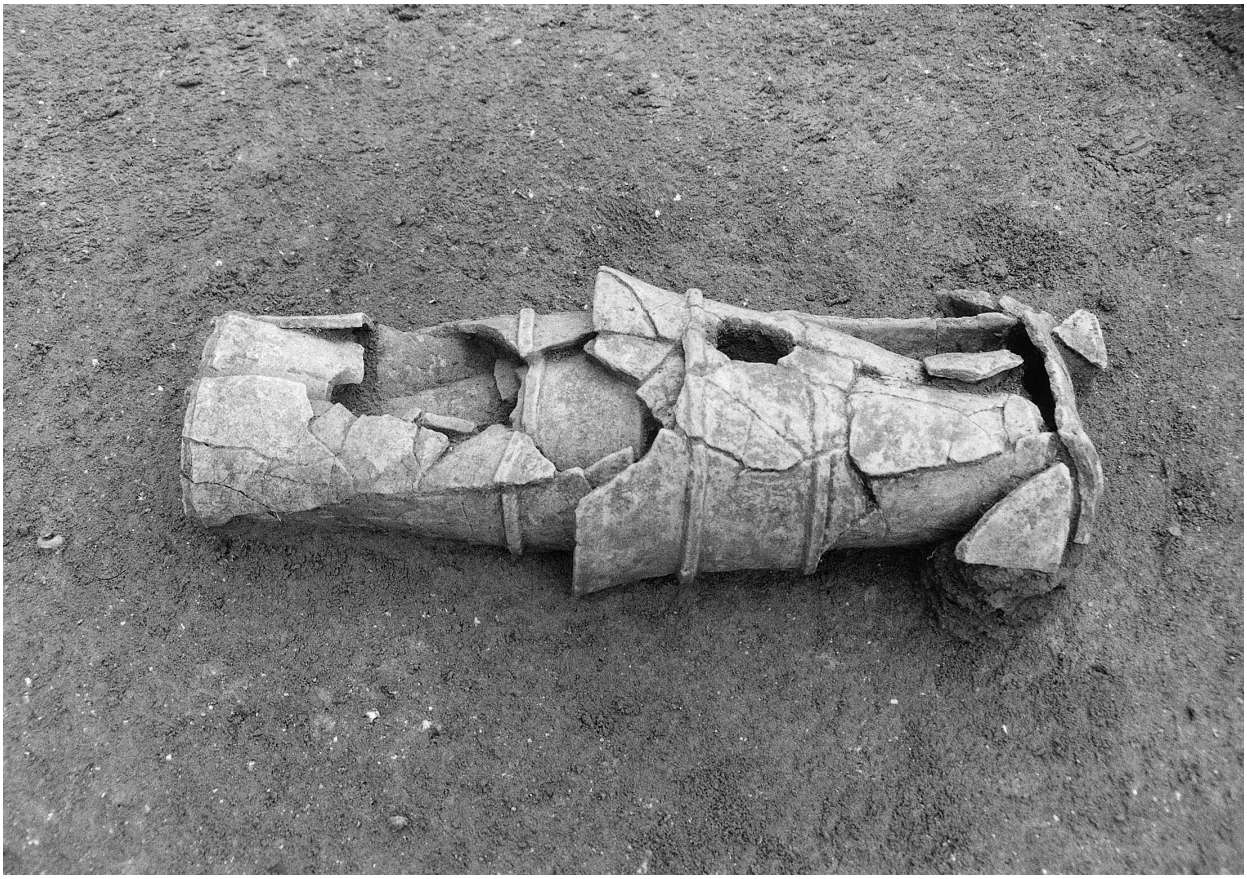
５号墳（東から）

ＰＬ６

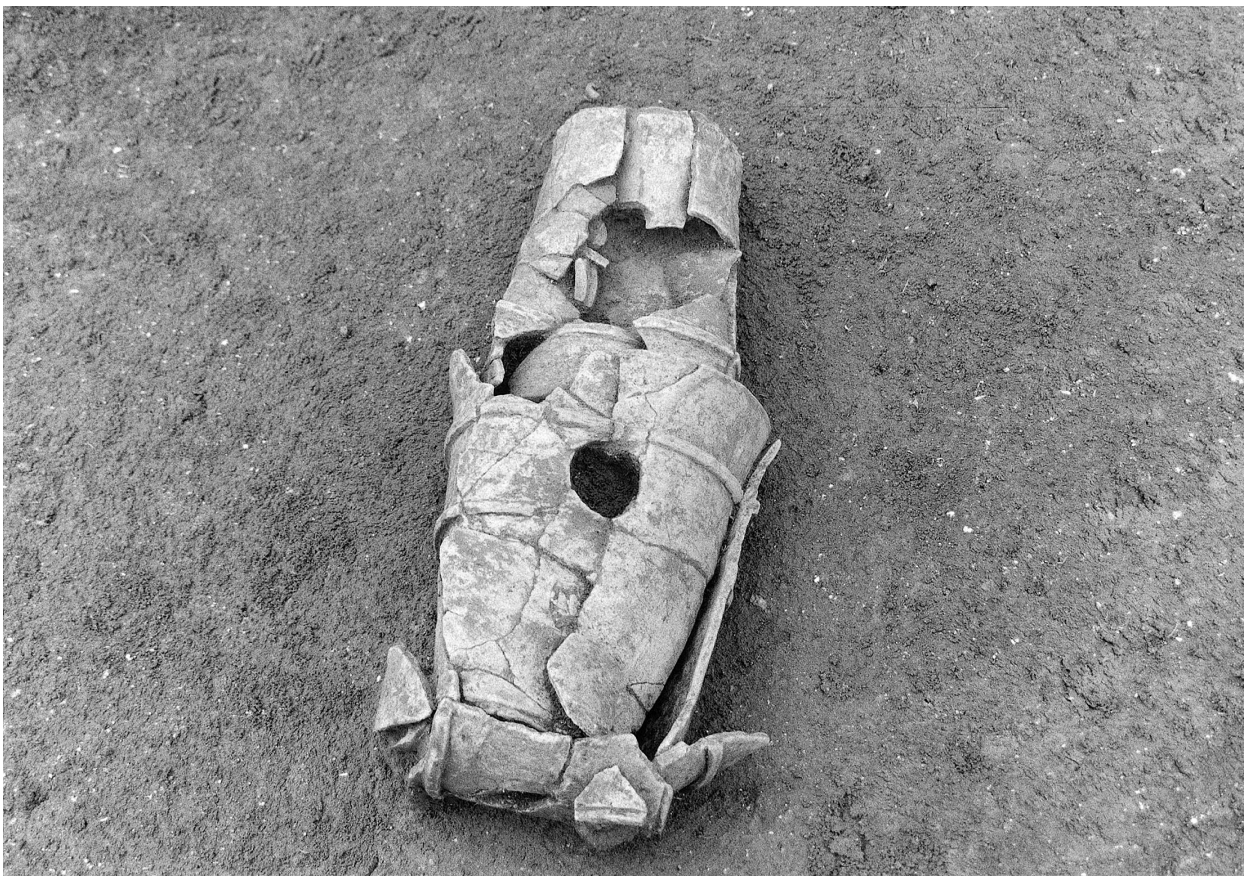


５号墳埴輪棺出土状況（崩落埴輪除去前　北から）

５号墳埴輪棺出土状況（崩落埴輪除去後　北から）



５号墳埴輪棺出土状況（崩落埴輪除去後　南から）

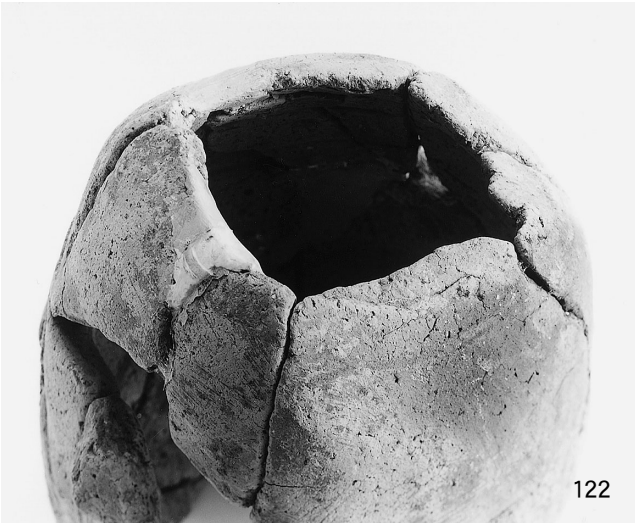


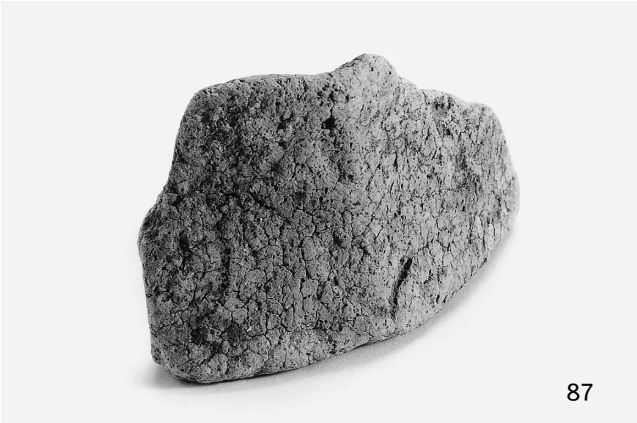
５号墳埴輪棺出土状況（崩落埴輪除去後　東から）

ＰＬ８

６号墳（北から）

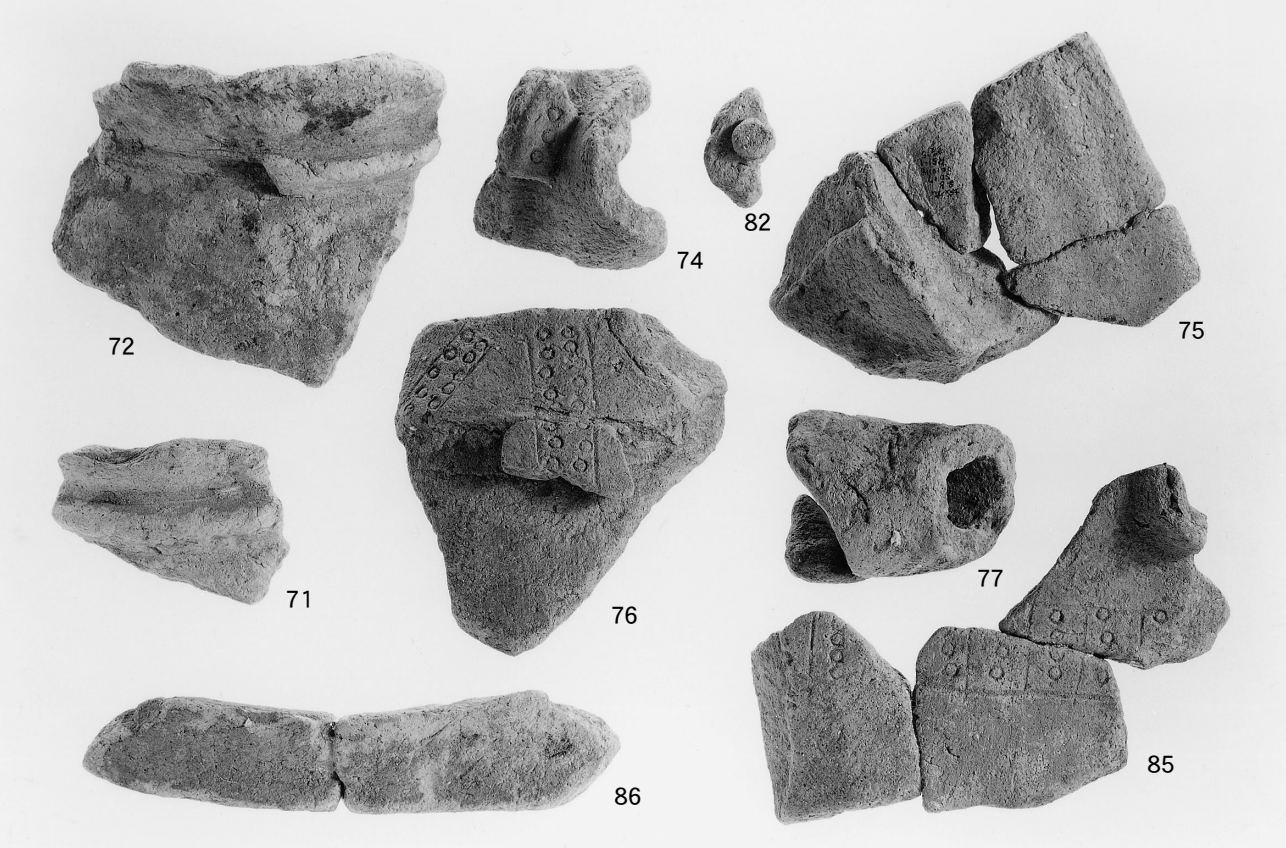
６号墳北周溝土層断面（東から）

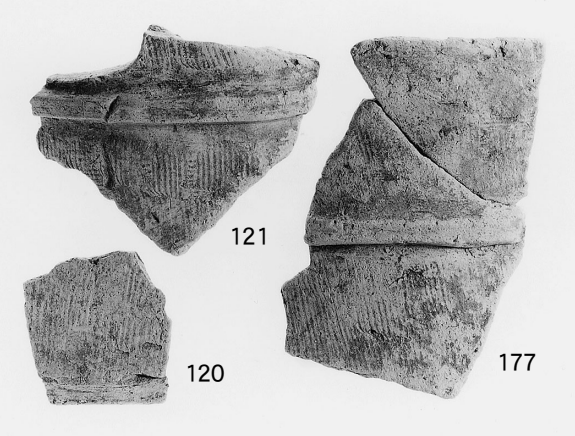




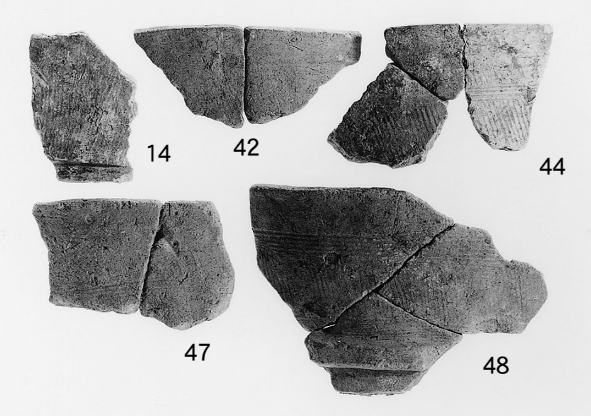
出土遺物（1）

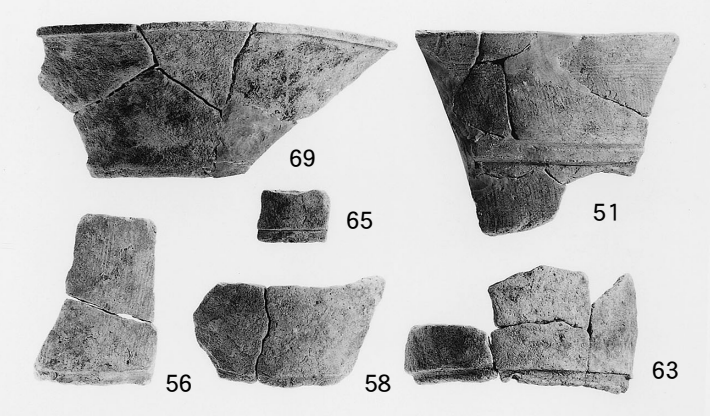
ＰＬ10





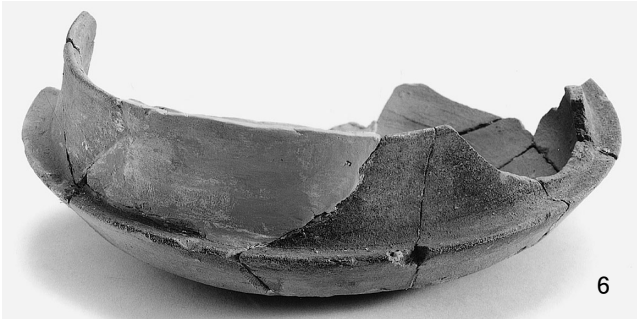
出土遺物（2）





出土遺物（3）

ＰＬ12



出土遺物（4）

16

17

19

18

21

24

22

23

28

29

出土遺物（5）

ＰＬ14

出土遺物（6）

出土遺物（7）

ＰＬ16

109

123

124

126

125

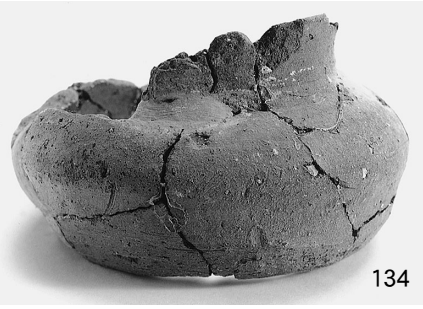
130

129

131

140

133

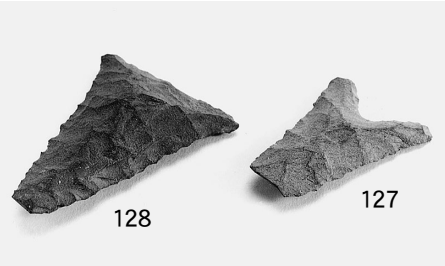

134

136

138

137

135


128

127

146

出土遺物（8）

報告書抄録

ふりがな	じょのひろこふんぐん・じょのひろいせき（だいにじ）はっくつちょうさほうこく
書名	城ノ広古墳群・城ノ広遺跡（第２次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２５７
編著者名	穂積裕昌　水谷豊　酒井巳紀子　田中久生（写真図版）
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒　515-0325　　三重県多気郡明和町竹川503番地　　℡　0596-52-1732
発行年月日	２００５年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
じょのひろこふん 城ノ広古墳 ぐん 群 じょのひろいせき 城ノ広遺跡	みえぐんあさひちょう 三重郡朝日町 おおあざかきじょのひろ 大字柿城ノ広	24343	27-2～6 1	136° 39′ 30″	35° 1′ 54″	20001120 ～ 20010315	1,300	県道（主要地方道）四日市朝日線緊急地方道路整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城ノ広古墳群 城ノ広遺跡	古墳	古墳	古墳・埴輪棺	埴輪・須恵器	
その他					

要約

本報告では、県埋蔵文化財センターが調査を担当した方墳５基を報告対象としているが、城ノ広古墳群はこれ以外に朝日町教育委員会が調査を担当した前方後円墳１基（城ノ広１号墳）がある。丘陵高所に位置する方墳群は、５世紀末に築造を開始し、埴輪を保持する。円筒埴輪は、底部がすべて淡輪技法によって製作されており、５号墳では円筒埴輪を重ねた埴輪棺も存在する。前方後円墳は、出土遺物からみると６世紀中葉以降であるが墳形の特徴はかなり古期の特徴をとどめる部分もあり、その築造時期の確定は今後の課題である。

三重県埋蔵文化財調査報告257

城ノ広古墳群・城ノ広遺跡（第２次）発掘調査報告

～三重郡朝日町柿所在～

2005年３月

編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲　山　文　印　刷